

2020 年度

文部科学省 平成 30 年度 私立大学研究ブランディング事業
「変革を担う女性」の持続的育成を目指した
「インクルーシブ・リーダーシップ研究」拠点の形成

津田塾大学 研究ブランディング事業 成果報告書



目次

1. はじめに —2020 年度 事業概要—	1
2. 運営組織	2
3. 2019～2021 年度の研究計画（変更分のみ）	6
4. 2020 年度の成果・進捗状況（研究活動）	9
5. 2020 年度の成果・進捗状況（ブランディング活動）	36
6. まとめと今後の課題	40

1. はじめに —2020年度 事業概要—

事業年度

2019年2月末、文部科学省による私立大学研究ブランディング事業の支援期間（補助事業期間）は、当初の5年間から、2018～2020年度の3年間に変更された。これを受け本学は、本事業の本格的な活動期間を2019～2021年度の3年間で実施することを決めた。同年3月、この期間での活動を念頭においた組織体制と財務体制を整え、各研究プロジェクトの研究計画およびブランディング計画の大幅な見直しを行った。また、2019年度からは本事業に係る研究プロジェクトの追加募集を行った上で、既存の4プロジェクトに新たに5プロジェクトを加え、合計9つの研究プロジェクトを推進している。

文部科学省に提出した事業計画書「5. 年次計画」においては、5年間に亘る実施計画の概要を記載していた。前述のとおり事業期間を3年間に変更したことで、本学は2019～2021年度の事業の計画を、①各研究プロジェクトの研究計画書と、それらを踏まえた②ロードマップ（別紙）の2資料で工程管理し、研究及びブランディング活動を行った。

予算規模

本事業に係る文部科学省からの経常費補助金（特別補助）の交付額は、2018年度は4000万円、2019年度及び2020年度は2400万円と示達され、3年間の補助金の合計額は8800万円となった。この金額は当初の事業計画の予算規模よりも縮減されたものとなった。これを原資とした上で、間接経費（本事業関係教職員の人件費等に補填）、研究費（「研究ブランディング研究費」として各研究プロジェクトに措置）、広報・普及費（戦略推進本部・津田梅子資料室・千駄ヶ谷キャンパス事務室に配賦するブランディング関連予算）の3項目に区分し、年度ごとに予算編成している。具体的な予算額は表1のとおりとした。

表1 予算規模

(単位：万円)

項目		年度					小計	合計
		2018	2019	2020	2021			
経常費補助金（特別補助）受入		4000	2400	2400			8800	
学内 配分	間接経費 ※1		1000	600	972	2572	8800	
	研究費		928	810	762	2500		
	広報・普及費 ※2		1700	1400	628	3728		

※1 間接経費は、主に、本事業に関係する専任教職員の人件費の補填に使用する。なお、2020年度未受入補助金における当初見込みより多かった余剰分については、学内の事業において、研究ブランディング事業の趣旨と重なる活動の費用に使用することができる。

※2 広報普及費は3か年を通し、前年度の執行状況及び毎年度の活動内容にあわせて予算編成をしている。

2. 運営組織

運営組織体制は基本的に2018年度と同様であり、ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップ（The Diversity Center for Inclusive Leadership :DCfIL）が、事業を実質的に推進している。また本センターには、取り組みに係る責任者としてセンター長を置いている。事業開始当初は4つの研究プロジェクトで活動を行っていたが、2019年度からは新たに5つのプロジェクトが加わり、プロジェクトは合計9つとなった。下の組織図に示されているように、各プロジェクトを相互に関連させながら、より充実した取り組みに向けて活動を活発化させている。また各組織の名称、構成員及び役割分担等は以下のとおりである。

ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップ（DC f IL） センター長
森川 美絵 総合政策学部総合政策学科主任・教授

2020年度 研究組織

1. 国際的女性リーダーシップ英語教育の方法論開発【リーダーシップ英語教育】

研究代表者名 ギャバン・グレイ（Gavan Gray） 総合政策学部総合政策学科 准教授

(a) Tsuda Leadership Bootcamp

ギャバン・グレイ（Gavan Gray） 総合政策学部総合政策学科 准教授 : 担当
田近 裕子 総合政策研究所特任研究員 : 補助

(b) Tsuda Outreach Group

ギャバン・グレイ（Gavan Gray） 総合政策学部総合政策学科 准教授 : 担当
有馬 果歩 総合政策学部学部生 : 学生チームリーダー

(c) Tsuda Square Group

ギャバン・グレイ（Gavan Gray） 総合政策学部総合政策学科 准教授 : 担当
石森あかね 総合政策学部学部生 : 学生チームリーダー

(d) Tsuda Model United Nations Group

ギャバン・グレイ（Gavan Gray） 総合政策学部総合政策学科 准教授 : 担当
ラウラ-アンカ・パレパ（Laura-Anca Parepa） 総合政策研究所特任研究員 : 補助
渡邊 葵 総合政策学部学部生 : 学生チームリーダー

補助チームメンバー

リサ・ダウ（Lisa Dow） 学芸学部英語英文学科 准教授
ジョシュア・アントル（Joshua Antle） 学芸学部英語英文学科 講師
吉田 真理子 学芸学部英語英文学科 教授
星野 徳子 学芸学部英語英文学科 准教授

2. データ活用型政策研究と実践的教育プログラム開発【データ活用型政策研究教育】

研究代表者名 森川美絵 DCfIL センター長 総合政策学部総合政策学科主任・教授
担当 A（女性活躍のためのデータベース整備）

村木 厚子：総合政策学部総合政策学科 客員教授

森田 朗 : 同 教授

伊藤由希子： 同 教授

新海 尚子： 同 教授

伊藤 るり： 同 教授

担当 B (データ駆動型産官学連携課題解決モデルの構築)

曾根原 登： 同 教授・総合政策研究所所長

酒井 善則： 同 客員教授・総合政策研究所

津曲 俊英： 同 教授・地域連携推進センター

鈴木 貴久： 同 特任助教

担当 C (実践的教育プログラム化のための調整)

大島 美穂： 同 教授

萱野 稔人： 同 教授

担当 D (進捗管理、事務管理)

中條 賢二： 千駄ヶ谷キャンパス事務室課長

千駄ヶ谷キャンパス事務室

3. 社会的インクルージョン研究基盤形成【社会的インクルージョン研究】

研究代表者名 柴田 邦臣 学芸学部国際関係学科 准教授

[インクルーシブ教育支援室]

ディレクター 柴田 邦臣 学芸学部国際関係学科 准教授 : 全体統括

コーディネーター 松崎 良美 学芸学部国際関係学科 助教 : 地域連携・国内学会担当

専門アシスタント 三好 祐子 学芸学部非常勤講師・手話通訳士 : 福祉制度担当

研究ブランディング事業担当者 濱松 若葉 TA・国際関係学研究科院生 : 調査・広報担当

国際連携事業担当者 貝原 千馨枝 TA・国際関係学研究科大学院生 : 国際学会・イベント担当

事務員 浜中和華子 IES 担当職員 : 事務会計担当

4. 津田アーカイブを用いた多様で先進的な女性ロールモデル研究【女性ロールモデル研究】

研究代表者名 大類 久恵 学芸学部英語英文学科教授・津田梅子資料室長

高橋 裕子 学長・学芸学部英語英文学科 教授: 対象者の選定とインタビュー、文献調査・研究

北村 文 学芸学部英語英文学科 准教授: 対象者の選定とインタビュー、文献調査・研究

根本 和彦 津田梅子資料室事務室 事務室長事務取扱

村田 安代 津田梅子資料室事務室

中田 友紀 津田梅子資料室事務室

山崎 千瑛 戦略推進本部事務室

: データベースの構築、所蔵、活用、対象者の選定、文献調査・研究

5. グローバルな計算社会科学的視点による社会科学と情報学の融合教育・研究プログラムの開発【社会科学・情報学融合教育】

研究代表者名 小舘 亮之 副学長・総合政策学部総合政策学科 教授

鈴木 貴久 総合政策学部総合政策学科 特任助教 : データ収集と分析、教育プログラムの開発

若原 俊彦 総合政策研究所客員教授 : 教育プログラムの開発

6. 東京都議会議員の政治的態度と多様性の分析を通じた実践的教育【都議会議員分析教育】

研究代表者名 中條 美和 総合政策学部総合政策学科 准教授

7. 主体的学びを支える情報のアクセシビリティを考える—マイノリティのリテラシーの実証研究【マイノリティ・リテラシー研究】

研究代表者名 松崎 良美 学芸学部国際関係学科 助教

柴田 邦臣 学芸学部国際関係学科 准教授 : ICT の教育現場活用に関する専門的知識提供

三好 祐子 学芸学部非常勤講師・手話通訳士 : 手話による情報提供に関する専門的知識提供

8. インクルージョンにおける AI (人工知能) の活用可能性【インクルージョン AI 活用】

研究代表者 杉村 大輔 学芸学部情報科学科 准教授 : AI テクノロジー、情報工学担当

柴田 邦臣 学芸学部国際関係学科 准教授 : 福祉社会・インクルージョン担当

濱松 若葉 大学院国際関係学研究科大学院生 : 福祉 AI 研究専攻・分析担当

9. 「クロスオーバー・若手リーダーシップ育成事業」【若手リーダーシップ育成事業】

〈指導〉代表者 柴田 邦臣 学芸学部国際関係学科 准教授

森川 美絵 DCfIL センター長 総合政策学部総合政策学科主任・教授

〈対象〉助教、研究所研究員、大学院生（博士課程在籍ないしは進学予定）で、指導教員の推薦を得た者で、学振 PD・DC 応募に該当する若手研究者

1. ～4. のプロジェクトを架橋するようなアイデアを若手研究者から募集し、目に見える連携の契機とし、本研究を、若手のインクルーシブ・リーダーシップ力の育成そのものの具体例とする。そのため、本学の若手研究者がアイデア・企画などをもち寄って、お互いに何度もディスカッションを繰り返し、研究企画を練り上げている過程を支援する（アイデアソン）。また資金面でもサポートする。センター直轄の上で、担当教員が指導を担当する。

ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップ 事務局

学長特命補佐（戦略推進担当） 八丁地 園子

戦略推進本部長 根本 和彦

戦略推進本部事務室広報担当課長 斉藤 治人

教育研究支援事務室長 栗原 郁太

戦略推進本部事務室 山寄 千瑛

戦略推進本部事務室 楯岡 栄津

3. 2019～2021 年度の研究計画（変更分のみ記載）

2020 年 3 月末をもって田近裕子教授（元総合政策学部）が退職したことにより、国際的女性リーダーシップ英語教育の方法論開発のプロジェクトは、ギャバン・グレイ（Gavan Gray）総合政策学部総合政策学科准教授が研究代表者を引き継いだ。これに伴い、研究計画書の改訂があったので、次頁以降に掲載する。

2019～2021 年度 研究ブランディング研究費 研究計画書

研究代表者名<Representative> Gavan Gray	プロジェクト名（プロジェクトに <input checked="" type="checkbox"/> をつけてください） <input checked="" type="checkbox"/> 国際的女性リーダーシップ英語教育の方法論開発 <input type="checkbox"/> データ活用型政策研究と実践的教育プログラム開発 <input type="checkbox"/> 社会的インクルージョン研究基盤形成 <input type="checkbox"/> 津田アーカイブを用いた多様で先進的な女性ロールモデル研究	
研究課題 <Research theme> Umeko Tsuda, the founder of Tsuda University, outlined the initial road for women to become influential in international settings and bring about major changes in our society. This project endeavors to establish prominent English-speaking leadership programs that will foster young women who will be influential in creating a better society. Its underlying strategy in doing so is to empower students to take control of their own development by generating and organizing their own groups to develop specific goals. Only by engaging in and learning from this kind of authentic, practical experience can students truly learn the leadership and communication skills they will need to break new ground as social innovators.		
研究組織（上記研究代表者以外の共同研究者及び役割分担） <Research organization (Co-researchers and division of roles) > Gavan Gray (Project Leader) Laura-Anca Parepa (Model United Nations Assistant Coordinator) Hiroko Tajika (Leadership Bootcamp Assistant Coordinator) Okuwaki Natsumi (Student PR Group Assistant Coordinator) Lisa Dow (Auxiliary Member), Joshua Antle (Auxiliary Member), Mariko Yoshino (Auxiliary Member), Tokuko Hoshino (Auxiliary Member)		
研究経費総額 <Total cost>	AY 2019	127.5 万円
	AY 2020	(Fixed) 117.5 万円
	AY 2021	(Fixed) 117.5 万円
	Total	362.5 万円
使用内訳（設備備品費、消耗品費、国内旅費、外国旅費、謝金、当該プロジェクトに係る研究会関連経費、ワークショップ関連経費、その他） <Breakdown of amount (Equipment expenses, Materials (leadership training; Communication skills; Student mentoring), Event Support, Domestic Travel Expenses, Student Assistants for Project Activities, etc.)>		
【2020 年度】 ¥1,175,000		
Equipment	¥600,000 (Multimedia production tools, recording equipment)	
Material (Leadership Training)	¥200,000 (Books + other resources for leadership activities)	
Material (Communication Skills)	¥150,000 (Books, boardgames + tools for developing speech)	
Material (Student Mentoring)	¥150,000 (Books for student teaching and training activities)	
Event Support	¥35,000 (Web-site hosting, stationary, etc.)	
Domestic Travel Expenses	¥20,000 (Student interviews + research activities)	
Student Assistants	¥20,000 (¥990 x 20 hours)	
【2021 年度】 ¥1,175,000		
Equipment	¥85,000 (Technical equipment needed by groups to carry out activities)	
Bootcamp	¥400,000 (If possible in latter half of the year)	
Material	¥100,000 (Books + other resources for leadership activities)	
Guest Speaker	¥50,000 (Reimbursement for invited speaker)	
Event Support	¥250,000 (Model United Nations: ¥160,000 x 4 students, if possible in the latter half of the year, Leadership Symposium: ¥60,000, Web-site hosting, refreshments, stationary, etc.)	
Domestic Travel Expenses	¥240,000 (Model United Nations: ¥160,000, Student interviews + research activities, Conference Participation: ¥60,000)	
Student Assistants	¥60,000 (¥990 x 20 hours x 3 projects)	

研究代表者名 <Representative>
Gavan Gray

研究目的（学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義などを簡潔に記入してください）
Purpose (Please briefly describe the academic characteristics, original points, expected results and significance of this research.)

The purpose of this project is twofold: (1) to equip women with leadership and communicative competence so that they can work in leadership roles and effectively coordinate and organize team-based activities and projects that have goals of international and social innovation and; and (2) improve the English and broader communication skills of students as part of a comprehensive program of education and academic development that examines how leadership skills can be properly nurtured.

研究計画・方法（研究計画・方法を、実施時期・予定を明確にして、具体的に記入してください。）
Plans and methods
(Please clarify the research plan and method at the time and schedule of the project and write it specifically.)

【2020 年度】
Due to the impact of Covid and the restrictions on face-to-face interaction many planned leadership program activities (including the Bootcamp and guest speakers) had to be postponed and others altered to respond to the ongoing pandemic.

- Tsuda Outreach: Merged with Tsuda Fund group and continued its work with regional NGOs in an online format, regularly hosting online events, interviews and workshops.
- Model United Nations: Most Model UN activities were cancelled during the year and the student members instead focused on developing their skills through local training courses and small group activities.
- Tsuda Public Relations Group: A new student group formed which aims to produce video and print material to highlight and promote the activities of other student groups.
- Tsuda Square: (Name change from Tsuda Forum) Continued its activities to provide social opportunities for student to interact.
- Tsuda Mentors: A new group was proposed that hopes to work with high school and elementary school students to carry out teaching activities in English, i.e. using English to teach other academic skills.
- We continued to work to improve the leadership education program developed at the university in collaboration with domestic and overseas leadership education programs.

【2021 年度】

- The Student Project Groups (Tsuda Outreach, Tsuda Square, Tsuda Public Relations, Tsuda Mentors) will continue their planned activities throughout the year.
- Model United Nations: During the second half of the year we will send a team of students to join a Model United Nations event in Japan.
- We will hold a training Bootcamp to develop leadership skills based upon our successful partnership with ISA in 2019.
- We will provide training via workshops for students in communication and media skills to enhance their ability to carry out their group activities.
- Students will join a symposium to share their knowledge and experiences of the leadership program and provide feedback for how such activities may be developed or enhanced in the future.
- Teachers will participate in a national level conference to disseminate findings on the three year leadership program.
- Students will continue to play a central role in disseminating the knowledge gained regarding leadership by using equipment to record, prepare materials for dissemination, and communicate widely with domestic university students for dissemination.
- We will measure the results of the various projects, explore how to develop them, and disseminate the findings in academic literature.

研究代表者名 <Representative>

Gavan Gray

研究ブランディング研究費－3

論文等の投稿および公表の予定 Publication of the paper or report

(投稿・掲載予定の雑誌・書籍・記念誌名、投稿予定時期、公表予定時期を具体的に記入してください。)

文科省への事業報告の都合上、本事業の2年目の2021年3月までに、査読付きの学術論文を投稿する場合は1報以上、学内紀要等それ以外の雑誌等に掲載する場合は2報以上、公表できるように努めてください。教育プログラムの開発等の成果は、学内紀要や実践報告を掲載できる媒体を柔軟に検討してください。またこの研究ブランディング事業で取り組む研究に関する理論的基盤となる研究成果も織り込むことも可能です。この中には、他の外部資金や学内研究費を活用して執筆した論文等を含めることができます。)

(Specify the names of the magazines / books / commemorative magazines to be posted / published, the scheduled time of posting, and the scheduled time of publication.)

Due to the business report to MEXT, if you submit a peer-reviewed scholarly paper by March 2021, the second year of this project, you will submit at least one report and other journals such as bulletins on campus. Please try to publish at least two reports. For the results of educational program development, etc., please flexibly consider the media on which you can publish bulletins and practice reports. It is also possible to incorporate the research results that serve as the theoretical basis for the research undertaken in this research branding project. This can include dissertations written using other external funds or on-campus research funds.)

(So far) University journals and Research bulletins

Gray, G.P. (2020). Promoting Leadership through Proactive Student-led Initiatives. *Tsuda Review*. No. 65, December. pp. 27-43.

Gray, G.P. (2020), 'Means of Developing International Women's Leadership in English Education' in, *Present and Future Research that Seeks to Produce Inclusive Leadership*, DCfIL, Tsuda University. pp. 70-81.

Further articles will be published in 2021.

上記の論文等以外の研究成果公表の予定 <Plans for other research results>

(当該プロジェクトに係る研究会、ワークショップ、地域連携活動の予定・概要を記入してください。)

この研究会・活動等は、1年に1回以上行うように努めてください。このような活動がなじまない研究については、9月末日にその時点での研究成果報告(2,000文字程度)を、本学ウェブサイトの記事として公表するものとします。)

Please fill in the schedule / outline of the workshops, workshops and regional alliance activities related to the project.

Please try to hold this study group or activity at least once a year. For research where such activities do not fit well, a report of the research results at that time (about 2,000 characters) will be published as an article on Tsuda University website at the end of September.)

1. In June/July We will hold training workshops for students in areas such as the Model United Nations and video production.
2. In Autumn, students will (depending upon the state of Covid) participate in a Model United Nations competition and report the results in terms of its impact on their leadership education.
3. In February, students will participate in the leadership education training bootcamp with the support of the private company ISA. This activity will be an ongoing collaboration between Tsuda University and ISA to develop an effective leadership training methodology for Japanese university students.
4. In February we will hold a leadership symposium for students to allow participants in the leadership program to reflect on their experiences and share insights and messages about how leaderships training can be effectively developed in the future.

3. 2020年度の成果・進捗状況

2020年度は、9つの各プロジェクトにおいては、調査・研究、研究成果の報告・公表、研究成果を活用したブランディング活動等、それ以前より具体的に、広く社会に向けて諸活動を行った1年であった。以下に【研究活動】と【ブランディング活動】(36頁)に分けて、成果と進捗状況の要点を記す。

【研究活動】

- ① 前掲した2019～2021年度の研究計画書をベースにして諸活動を行った。コロナ禍の影響もあり当初の研究計画を変更せざるを得ないプロジェクトもあったが、状況に即して感染予防に十分に配慮しながら研究を行った。
- ② その結果、表2のとおり事業全体の業績・実績が蓄積された。論文等及びその他活字業績86件、口頭発表53件、学生発表11件、その他発表20件、その他活動4件、学生受賞4件、その他活動(学生)3件の合計181件であった。2018年度の143件、2019年度の171件から、さらに業績・実績件数が増えた。今般の局面であっても各プロジェクト代表者・メンバーが工夫を凝らし研究を進行させ、結果としてブランディング活動に結びついたといえる。

表2 事業関係業績・実績

	論文・活字業績	口頭発表	学生発表	その他発表	その他活動	学生受賞	その他活動(学生)	計
1. 国際的女性リーダーシップ英語教育の方法論開発	2							2
2. データ活用型政策研究と実践的教育プログラム開発	21	29	6	15	1	4	3	79
3. 社会的インクルージョン研究基盤形成	36	3						39
4. 津田アーカイブを用いた多様で先進的な女性ロールモデル研究	8	16	5					29
5. グローバルな計算社会科学的視点による社会科学と情報学の融合教育・研究プログラムの開発	6							6
6. 東京都議会議員の政治的態度と多様性の分析を通じた実践的教育	1							1
7. 主体的学びを支える情報のアクセシビリティを考える「マイノリティのリテラシーの実証研究	12	5		5				22
8. インクルージョンにおけるAI(人工知能)の活用可能性					3			3
9. 「クロスオーバー・若手リーダーシップ育成事業」								0
計	86	53	11	20	4	4	3	181

- ③ 本事業の重点取り組みである「白書・審議会等資料データベース(女性活躍のためのデータベース)」「津田塾大学デジタル・アーカイブ・システム」が、計画どおり稼働した。詳細は後述する。
- ④ 2019年度の研究ブランディング研究費の合計措置額は810万円、対して執行額の合計額は647万円となり、執行率は79.8%であった。研究費は適切に執行された。

2020年度 研究ブランディング研究費による研究成果等（概要）報告書

2021年 3月 11日

所属	津田塾大学総合政策部	氏名 (共同研究の場合は代表者)	Gavan Patrick Gray
研究課題名 国際的女性リーダーシップ英語教育の方法論開発			
研究組織 Tsuda Diversity Center for Inclusive Leadership (DCfIL) 研究ブランディング			
具体的な研究活動と成果の概要 (研究計画書の「2020年度の研究計画・方法」に記載した全ての内容に対して状況を記載) This year Covid-19 had a huge impact on the ability of students to engage in leadership activities. As a result, many planned events (such the leadership Bootcamp, Guest Speakers, and Model United Nations) had to be postponed. Several student groups (Tsuda Outreach, Tsuda Square, and the new Tsuda Public Relations group) managed to carry out other activities, either by working online (hosting online workshops, interviews and seminars) or by conducting their own small-group activities (often also done online). Feedback from students was collected and assessed to produce an academic paper on the progress of the project and these results were also shared at a symposium held at Tsuda University in September 2020. Students have continued to organise proactively in their groups and prepare for possible activities should more direct interaction become possible during 2021.			
研究業績・活動実績リスト Gray, G.P. (2020). Promoting Leadership through Proactive Student-led Initiatives. <i>Tsuda Review</i> . No. 65, December. pp. 27-43. Gray, G.P. (2020), 'Means of Developing International Women's Leadership in English Education' in, <i>Present and Future Research that Seeks to Produce Inclusive Leadership</i> , DCfIL, Tsuda University. pp. 70-81.			

2021年 3月 31日

所属	総合政策学科	氏名 (共同研究の場合は代表者)	森川美絵
研究課題名 データ活用型政策研究と実践的教育プログラム開発			
<p>研究組織</p> <p><u>担当A（女性活躍のためのデータベース整備）</u></p> <p>村木 厚子：総合政策学部 客員教授 森田 朗：同 教授 伊藤由希子：同 教授 新海 尚子：同 教授 伊藤 るり：同 教授</p> <p><u>担当B（データ駆動型産官学連携課題解決モデルの構築）</u></p> <p>曾根原 登：同 教授・総合政策研究所 酒井 善則：同 客員教授・総合政策研究所 津曲 俊英：同 教授・地域連携推進センター 鈴木 貴久：同 特任助教</p> <p><u>担当C（実践的教育プログラム化のための調整）</u></p> <p>大島 美穂：同 教授 萱野 稔人：同 教授</p> <p><u>担当D（進捗管理、事務管理）</u></p> <p>中條賢二：千駄ヶ谷キャンパス事務室 課長</p>			
<p>具体的な研究活動と成果の概要</p> <p><u>担当A（女性活躍のためのデータベース整備）</u></p> <p>2001年度以降の政府白書や政府審議会に記載の図表とそのバックデータを横断的に検索できる画面と検索エンジンである「女性活躍のためのデータベース」について、2019年度には試行版を制作したが、2020年度は正式に一般公開を実現した（https://empowerment.tsuda.ac.jp/）。正式版は、前年度と比較し、検索対象となる白書の種類が大きく広がるとともに（2019年度の12白書から、2020年度末の37白書へ）、検索対象を審議会等にまで拡張した（2020年度末で、3審議会、1諮問会議が対象となっている）。</p> <p>なお、審議会等資料に掲載された情報の構造を分析した結果、白書と同様の方法ではデータ処理が困難であることが判明したため、2020年度は審議会情報の格納のための体制構築もおこなった。</p>			

政府のデータから 図表を検索



図表タイトル

+ 条件追加

例) 人口ピラミッド

を含む▼

白書・審議会名

▼ 詳細検索

検索

クリア

本データ検索システムは、省庁横断的に幅広い視点から、政策に関わる社会課題や状況のエビデンスを把握できるエビデンススペースの政策マネジメント・ツールとして意義がある。本データ検索システムの内容とその意義の紹介も、以下の通り積極的に行った。

- ・本研究事業として実施した「オンライン公開研究会」での報告（2020年9月 <https://dcfil.tsuda.ac.jp/topics/0917.html>）
- ・「Diversity and Inclusion in Japan 研究会」での報告（2021年1月 <https://dcfil.tsuda.ac.jp/topics/0215.html>）
- ・国際会議での報告（第18回アジア太平洋カンファレンス、大分県、2020年11月 <https://dcfil.tsuda.ac.jp/topics/1222.html>）
- ・日本の Inclusive leadership に関して論じる英語書籍での分担執筆（査読中）

今後の課題としては、1) データ更新とシステム管理の持続性の確保、2) 幅広い利用者を想定した活用手法のモデル化、3) 社会的認知と利活用の向上があげられる（現時点の毎月アクセス数は3~400程度）。3点目の課題に対応するため、村木客員教授を軸に、「全国ダイバーシティネットワーク」（<https://opened.network/>）ともつながり、社会の多様性を尊重・考慮した政策形成（inclusive policy making）のためのツールとしての社会的発信を強化しつつある（2021年度に入り次第、「全国ダイバーシティネットワーク」のホームページに本検索エンジンのリンクを貼っていただくことになっている）。

また、研究班メンバーは各々の専門分野において、現代社会の課題に関する実証的把握分析や理論的検討を進め、研究成果として発信している。

担当B（データ駆動型産官学連携課題解決モデルの構築）

2019年度から継続し、「地元や地方との連携、産官学の連携、官民データ連携」に基づくデータサイエンスを主軸とした研究・連携活動を展開し、学部学生も参画しながら研究成果と活動実績を蓄積している。連携活動の中では、学生が主体的に地域や社会の課題解決に関わる活動を企画運営するとともに、その成果報告や提案・提言を対外的に発信する枠組みを構築している。

2020年度の主な連携先として、渋谷区、区立小学校、太田記念美術館、鯖江市、伊藤園、キュービー株式会社、NID、日本IBMなどがあげられる。

連携活動の具体例としては、例えば下記（1）（2）（3）がある。

（1）「津田2020オリパラ・プロジェクト」を契機とする学生主体の社会実装

津田塾大は五輪をきっかけにして地域の活性化を目指す「梅五輪プロジェクト」を展開している。新型コロナウイルス感染症の影響で、オリンピックパラリンピックの延期、学生の大学キャンパス内入構禁止などの状況下で実施できる活動として、バーチャル浮世絵展の開催というアイデアを学生がまとめた。津田塾大と連携協定を結んでいる太田記念美術館の協力を得て、同美術館が所蔵する歌川広重の代表作「名所江戸百景」のデジタル画像などを活用できることになり、実現した。コンテンツは、浮世絵

の魅力を学ぶ小学生向けデジタル教材「バーチャル浮世絵展@千駄ヶ谷キャンパス」としても開発され、実際に地元の小学校でも教材が使われた。その活動は、日経新聞などのメディアでも紹介された (<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ063897940W0A910C2000000/>)。

(2) S-SAP (シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー) 協定にもとづくキューピー株式会社 CSR部との連携活動

キューピー株式会社は食を通じた社会貢献、津田塾大学は大学生の健康へのコミットという立場から、大学生の食生活の課題と関連づけた「野菜摂取UP」というテーマで2019年度より連携活動を開始した。連携先からのプロジェクトマネジメントに関する助言協力を得ながら、課題設定(大学生の健康課題としての食生活・野菜摂取)、課題に関する実態把握とデータ分析、解決策の検討と実施を進めている(詳細は、津田塾大学連携推進センターHPに掲載の連携事例を参照 https://www.tsuda.ac.jp/aboutus/corporation/case12_kewpie.html)。2019年度は問題把握のためのデータ収集分析を行った。分析結果は、学生による論文化を進めている(雑誌『総合政策研究所報』投稿準備中)。2020年度は把握した問題の解決策の提案と実行として、学生が主体となり情報発信活動「べじらいふ。ずぼら女子大生の野菜日記」を展開した。

(3) 飯田市との包括連携協定に基づく活動

2018年度に締結した包括連携協定の元、2020年度は地域の資源や魅力の情報発信という課題に対応し、学生主体で以下の動画の作成・公開を行なった。

・飯田市が実施する国内最大の人形劇の祭典「いいだ人形劇フェスタ」に関わり、人形劇PR動画(飯田女子高等学校人形劇クラブに所属する生徒の皆さんへのインタビューを基に制作したもの)

・飯田市観光PR動画(2020.2に飯田市を訪れた際に撮影した映像資料を使用し制作したもの)

・車椅子スポークアクセサリ「Me's」のPR動画(飯田市が日本一の生産量を誇る水引を使って商品化した車椅子スポークアクセサリのPR動画)

これらの動画公開までの諸工程(動画内容の構成、映像の素材集め、編集、日本語/英語字幕作成、Youtubeのサムネイル、投稿文作成など)は、担当教員の指導のもと全て学生主体で行った。成果は長野県飯田市主催の「IIDAブランディングセッション プレス報告会」(2021年2月16日)にて飯田市長同席のもとでプレスリリースされた。

担当C (実践的教育プログラム化のための調整)

データオリエンテドに地域課題解決を検討提案できる人材育成の教育プログラム開発の連携基盤を強化した。具体的には、文部科学省 科学技術人材育成費補助事業 データ関連人材育成プログラムの一環として電気通信大学が展開する「データアントレプレナーコンソーシアム(以下、コンソーシアム)」の一員として、人工知能、IoT、ビッグデータ、サイバーセキュリティ分野を中心とする産業界および研究機関等と連携した人材育成の活動に関わってきた。また、ICT技術を活用したソーシャルイノベーションの実現を可能にし、Society5.0時代を牽引していく女性人材を産学一体で育成していく枠組みとして、津田塾大学、日本女子大学、富士通株式会社、アシアル株式会社、富士通クラウドテクノロジーズ株式会社との連携により「女子大学生ICT駆動ソーシャルイノベーションコンソーシアム」を設立した(2021年2月)。

また、「実践的教育プログラム」の実践事例を持続的に確保する観点から、実践的な連携の枠組みを構築し、成果を「東京と大学との共同事業」への企画書提出としてまとめた(2021年2月)。

(提案名)「Withコロナ時代のデジタル東京五輪— AI歌川広重が描くデジタル『新名所江戸百景』 VRを用いた『バーチャル五輪浮世絵展@都庁美術館』の構築事業 —」

地元の小学生や大学生と協力して商店街・東京オリパラ会場・観光地の写真撮影を行い、AI歌川広重により浮世絵に変換してAI浮世絵グラムサイトへ投稿すること、また、VRを用いた東京都庁展望台美術館の構築とオンラインのAI歌川浮世絵の展示などを行うものである。事業実施により、感染や不登校対策、障害の有無に関係なく学び続けられるオンライン教育の推進、スマホやタブレットPCを用いたVRを活用したスポーツ観光の促進、リアルな競技場とバーチャルな美術館が融合した芸術文化発信による地域経済の活性化など、with コロナ時代の社会課題にも対応している。

提出した企画書は東京都事業としては採択されなかったが、その内容は産官学連携によるデータ利活用を通じた社会的課題の解決リーダーシップを発揮する人材育成のための大学教育プログラムの一つのモデルとして、応用展開可能である。

A～Cの内容と成果については、学術的な媒体にとどまらず、各種メディアおよび総合政策学科発信メディアにより積極的に情報発信を行ってきた。

また、総合政策学科が位置する渋谷区のコミュニティFM「渋谷のラジオ」の番組「渋谷社会部」にて、教員・学生が内容編集と司会進行を行い、地元への積極的な情報発信をしてきた（津田塾大学総合政策学科 学科発信メディア「渋谷のラジオにおける活動報告（2020年度）」<https://cps.tsuda.ac.jp/20210323.html>）。

さらに、学生には、データ分析活用を通じた課題解決のアイデア考案とその具体化について、学外での各種コンペへの参加を積極的に奨励した。その成果は、学生の受賞や最終選考への進出などとして具体的に現れている。

研究業績・活動実績リスト

【論文等（論文・研究ノート・報告・事例紹介など）】

Aiko Hoshiai, Yasuka Kusumoto, Taiji Hoshiai, Naoki Kimura, Yukiko Ito(2020) “Factors Influencing Oral Hygiene Management in Patients with Rheumatoid Arthritis” Clinical Oral Investigations, Springer, Accepted.

Ito, Ruri; Mie Morikawa(2020) “Eldercare, Gender Relations, and Migrant Labor in Japan: Approaching the Interplay of Informal and Formal Care” with Mie Morikawa, Handbook on Gender in Asia, edited by Shirlena Huang, and Kanchana N. Ruwanpura, Edgar Elgar, pp.107-127.

森川美絵(2020) 「介護の社会化」は何をもたらしたのか, 『都市問題』, 2020年4月号: P2-7.

森山葉子, 森川美絵, 中村裕美, 白岩健, 田宮菜奈子, 高橋秀人「日本語版 ASCOT による要介護高齢者の社会的ケア関連 QOL の測定と関連要因」, 『保健医療科学』, 69(5): 460-470.

相田仁, 酒井善則(2020) 「NGN 接続料における優先パケット課金のモデル化」, 電子情報通信学会論文誌 B, Vol. J103-B No. 8, 344-352,

【書籍】

Ruri ITO and Mie MORIKAWA (2020) ‘Eldercare, Gender Relations, and Migrant Labor in Japan: Approaching the Interplay of Informal and Formal Care(ch.7)’ in Shirlena Huang and Kanchana N. Ruwanpura eds., *Handbook on Gender in Asia*, Edwerd Elger, 2020. July31.

森川美絵 (2020) 『よくわかる福祉社会学』, ミネルヴァ書房, (担当: 全体構成・編集、および、約10項目の分担執筆), 編著者: 武川正吾、森川美絵、井口高志、菊地英明, 2020年10月.

森川美絵 (2020) 『社会福祉の原理と政策』, 中央法規出版, (担当: 第7章「福祉政策の構成要素と過程」分担執筆), 編集者: 埜洋一、伊藤新一郎、武川正吾, 2020年11月.

萱野稔人 (2020) 『名著ではじめる哲学入門』, NHK 出版, (NHK 出版新書)、2020年9月.

萱野稔人 (2020) 『カント 永遠平和のために——悪を克服する哲学』, NHK 出版, 2020年4月.

【その他の活字業績（新聞掲載記事・学術雑誌以外の記事など）】

村木厚子「生まれた『全員当事者意識』改革への絶好のタイミング」(特集 2020 年後半経済大展望 インタビュー) 週刊エコノミスト 2020年8月18日号 P39

村木厚子「女性の正規雇用『L字』カーブ」(取材対応) 読売新聞 2020年8月14日5面

村木厚子「女性の健康週刊に考えたい 未来を担う女性たちに」(座談会)「厚生労働」2021年3月号 P. 30-33

村木厚子「ジェンダーを超えて」(インタビュー) 国立歴史民俗博物館 図録「性差の日本史」P. 256-259

伊藤由希子「過剰な「病床確保」は医療提供体制を弱める」『週刊東洋経済』東洋経済新報社, 2020年8月1日. <https://premium.toyokeizai.net/articles/-/24221>

伊藤由希子「医療保険制度の課題と将来 —「つなぎ」の危機と「持続」の危機— 社会保障読本 2020年版(理論編) —医療・介護・年金制度の現状と課題・将来—, 『週刊社会保障』2020年8月10日 (No. 3083) .<https://www.sociohealth.co.jp/magazines/hosyo/422093083.html>

伊藤由希子「病床再編の医療経済的効果」『病院』2020年11月号, 医学書院. <https://www.igaku->

shoin.co.jp/journal/detail/39076

伊藤由希子「経済・財政一体改革における医療保険制度改革ー「魂なきデジタル化」と「根拠なき先送り」への警戒を」『健康保険』2020年12月号, 健康保険組合連合会.

https://www.kenporen.com/book/kenko_hoken/2019-12-31-13-00.shtml

伊藤由希子「改革工程表2020を読むーデータやエビデンスに基づき政策の妥当性を評価・検証」, 『週刊社会保障』2021年1月18日 (No. 3104) .

<https://www.sociohealth.co.jp/magazines/hosyo/422093104.html>

伊藤由希子「パンデミック克服 病院の統合・再編を」日本経済新聞電子版 2021年2月16日.

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGH098EU0Z00C21A2000000/>

森川美絵 (2020) 「書評: 中川清『近現代日本の生活経験』左右社, 2020年3月」『社会保障研究』4(4):544-548,

森川美絵 (2021) 「書評: 安立清史『超高齢社会の乗り越え方』弦書房, 2020年12月」『社会学評論』71(3).

【口頭発表 (学会)】

伊藤由希子・江崎禎英・遠藤久夫・翁百合・草場鉄周・近藤尚己 「予防と健康増進: エビデンスに基づく政策形成のあり方」第15回医療経済学会, 基調講演・シンポジウム, 2020年9月4日

伊藤るり「本書の構想について」IGSセミナー『家事労働の国際社会学』を読む(お茶の水女子大学ジェンダー研究所) 2020年11月15日(オンライン)

新海尚子、大島美穂「クォーター制に伴う夏期間の学外学修活動の認知、非認知スキルへの効果およびアクティブ・ラーニングとの関連性について: オンライン教育における検証」日本教育工学会2021年春季全国大会、2021年3月6日、オンライン(ホスト校: 関西学院大学)

戸根木希、鈴木貴久、曾根原登 「オンラインでのピアラーニングを活性化させるためのグループ分け方法の検討ー授業での課題取り組み時の共感距離に着目した実証実験」情報処理学会第83回全国大会、2021年3月18日.

【その他発表 (講演会講演、ワークショップ研究会発表、特別講義、公開講座など)】

村木厚子「仏教とSDGs 『女性活躍』を考える」全日本仏教会主催シンポジウム「仏教とSDGs 現代社会における仏教の平等性とはー女性の視点から考える」, 2020年8月25日

村木厚子「長く、楽しく、元気に生きる」多摩市主催「健幸まちづくりシンポジウム (TAMA 女性センター共催講座) 女性のための健幸づくりー自分を大切に、仕事・子育てを笑顔で～」, 2020年11月9日

村木厚子「人生100年時代をどう生きるかー女性の元気は社会の元気ー」全国シルバー人材センター事業協会主催シンポジウム, 2020年11月25日

村木厚子「ジェンダー・ダイバーシティ 実践のステージへ」全国ダイバーシティネットワーク(事務局大阪大学) 主催シンポジウム, 2020年12月14日

村木厚子「ウィズコロナの時代のワークライフバランスを考える」山形大学主催ワークライフバランス研修会, 2020年12月23日

村木厚子「これからの時代の『働き方』を考える」兵庫経営者協会主催政策労働部講演会

村木厚子「共生社会を創る」全国市町村国際文化研修所(JIAM) 主催 市町村議会議員特別セミナー, 2021年1月25日

村木厚子「働きやすく暮らしやすい社会づくり ~今、女性活躍推進に求められていること~」大分県主催女性活躍推進セミナー, 2021年3月12日

伊藤由希子「レジリエンスをどう測るのかー救急医療編」RISTEX 公開シンポジウム「病院のレジリエンスを考える」オンライン開催, 2021年3月6日

伊藤由希子「地方行政機関が保有する医療データの二次利用についてー自治体と研究者が支え合える関係のためにー」RISTEX 公開シンポジウム「自治体調査データを掘り起こすーEBPM・政策研究の可能性と課題」オンライン開催, 2021年3月5日

Yukiko Ito “FDI Seminar 2021: Recent Trends of Japanese FDI, Comment” Japan Institute for Overseas Investment (JOI), Business Development Dept. Online Webinar (2021/02/16)

伊藤由希子「政策形成過程における経済モデルの利用と課題ー医療提供体制を例に」第3回SciREXオープンフォーラム「科学技術イノベーション政策の新展開」シリーズ第五回「アフターコロナの政策のための科学に向けてーリスクモデルと経済モデルの統合可能性ー」(2021/01/26)

伊藤由希子「急性期医療の集約と地域医療の過不足への影響(山形県米沢市を例に)」フィナンシャルレビュー公開検討会, 財務省財務総合政策研究所 (2020/12/14)

伊藤由希子「キャリアマネジメントの経済学ー日本の人事をデータでとらえる」損害保険事業総合研究所シンポジウム (2020/12/04)

伊藤由希子「経済・財政一体改革における社会保障制度改革」第764回社会保険特別研究会, 株式会社法研. (2020/11/27)

Yukiko Ito, Mie Morikawa “Does the Database for White Papers and Council Documents Encourage Inclusive Leadership?” Advancing the Discourse on Inclusion and Inclusive Leadership, CIL Special Session in the Asia-Pacific Conference, Online. (2020/11/14)

伊藤由希子「地域医療構想と病床再編」自治医科大学「地域医療学」特別講義 (2020/11/06)

伊藤由希子「医学研究のための多変量解析」東京医科歯科大学「統計学セミナー」特別講義 (2020/10/17)

伊藤由希子「病床再編の現状と課題」21世紀医療問題研究会, 矢野経済研究所 (2020/09/29)

伊藤由希子「救急搬送情報を用いた医療の機能分化に関する考察」三重大学医学系研究科産業医学・公衆衛生セミナー, オンライン (2020/06/08)

伊藤由希子「地域医療構想と公立・公的病院の再編統合」IQVIA ソリューションズ・ジャパンセミナー (2020/05/15)

伊藤るり「解説 SDGs ゴール5 ジェンダー平等を実現しよう」NGO 開発メディア GANAS 第3期 SDGs 大学, 2020年9月26日 (オンライン)

伊藤るり「日本社会の『ジェンダー平等』と移住家事労働者受入れ」NGO 開発メディア GANAS 第3期 SDGs 大学, 2020年9月26日 (オンライン)

大島美穂「多文化共生社会ー北欧外交に学ぶ」佐倉市国際文化大学『令和2年度(2020)講義録』公益財団法人佐倉交流基金, 12~27頁。

【プレスリリース】

伊藤由希子、村木厚子、コーエンズ英理「白書・審議会データベース」渋谷のラジオ、渋谷社会部 2020年6月23日放送 (55分) <https://note.com/shiburadi/n/ndb210b63267b>

曾根原登「初めての体験続くが… ICT に慣れる好機」日本経済新聞, 2020年4月8日. <https://www.nikkei.com/article/DGKKZ057766220X00C20A4TCN000>

曾根原登「浮世絵を知ろう 津田塾大が小学生用デジタル教材」日本経済新聞, 2020年9月17日. <https://www.nikkei.com/article/DGXMZ063897940W0A910C2000000>

曾根原登「五輪開催地の子供たち、「楽しみ」と「不安」交錯」日本経済新聞, 2020年12月28日. <https://www.nikkei.com/article/DGXZQODH241050U0A221C2000000>

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」日刊工業新聞, 2021年02月23日朝刊9面.

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」電波新聞, 2021年02月24日朝刊4面

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」日本経済新聞電子版, 2021年02月22日. <https://www.nikkei.com/article/DGXZQODZ222W10S1A220C2000000/>

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」マイナビニュース, 2021年02月22日.

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」EdtechZine (教育・技術), 2021年02月22日.

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」Edtech Media (教育・技術), 2021年02月22日.

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」富士通, 2021年02月22日.

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」大学プレスセンター, 2021年02月22日.

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」AFP BB ニュース, 2021年02月22日.

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」バリュープレス, 2021年02月22日.

曾根原登「女性IT人材、産学連携で育成 富士通や津田塾大など」産経BIZ, 2021年02月22日.

■ 学生による発表 (論文、口頭発表 等)

【論文】

下釜 多瑛、永井 遥夏、岸野 佐保、和田 真由子、亀井 詩貴子、香美 玲奈、新海尚子、趙芝良 (2020) 「台湾の都市と地方における SDGs の観点から見た観光産業 (Tourism Industry in Terms of SDGs

in Taiwan-Comparing Urban and Rural Areas)』『総合政策研究所報』津田塾大学総合政策研究所。
竹村美沙希・上間広果「地域市民団体の活性化を通して、まちづくりの担い手の育成は可能かー市民活動コーディネーターへのインタビューを踏まえてー」『総合政策研究所報』津田塾大学総合政策研究所。掲載受理（2020年3月）

大島幸・窪田至音・山口もね・塚越月麦「長野県飯田市における持続的な人形劇文化の継承を目指してー国内外の例からの考察ー」『総合政策研究所報』津田塾大学総合政策研究所（掲載受理（2020年3月）

尾崎晴佳「生活リスクに対する私的準備は進んだか？ー1998年から2016年の生活保障に関する調査からー」『生命保険論集』生命保険文化センター。掲載受理（2021年3月）。

有馬果歩・新山美月・石森明音・竹内奏絵「To Be All Round Women」2021年2月野村ホールディングス・日本経済新聞社主催「第21回日経STOCKリーグ」大学生の部・入選

<https://manabow.com/sl/result/21/nyusen.html>

市橋来夏・菊田葵・工藤桂菜・瀧井日奈子「若者の投票率はなぜ低下したのかー都道府県別・年代別投票率 パネルデータ(2000-2020)分析ー」総務省統計局、独立行政法人センター大学共同利用機関情報・システム研究機構統計数理研究所・一般財団法人日本統計協会共催「2020年度統計データ分析コンペティション」特別賞（統計活用）受賞（大学・一般の部）

<https://www.nstac.go.jp/statcompe/doc/2020/2020U52-toku2.pdf>

【口頭発表】

大島幸・伊藤由希子「人形劇を通じた国際文化交流～津田塾生による AVIAMA 英語プレゼンテーションと、現在の取組について～」飯田学輪大学（2021年1月23日）オンライン開催

<https://www.youtube.com/watch?v=VNJbqgu17kI&t=6341s>

【表彰】

・市橋来夏・菊田葵・工藤桂菜・瀧井日奈子「若者の投票率はなぜ低下したのかー都道府県別・年代別投票率パネルデータ(2000-2020)分析ー」、総務省統計局、独立行政法人センター大学共同利用機関情報・システム研究機構統計数理研究所・一般財団法人日本統計協会共催「統計データ分析コンペティション 2020」特別賞。
(<https://www.nstac.go.jp/statcompe/doc/2020/2020U52-toku2.pdf>)

・橘風花、古市香菜子、原口史帆「利用者参加型の知恵共有サービスにおけるコミュニケーションの課題と提案」情報コミュニケーション学会第18回全国大会（オンライン開催）、研究奨励賞
(<http://www.cis.gr.jp/award.html>)

・宮地御寧、宮森京伽、土井美亜、小寺咲綾「Humanizerの開発とその活用ー話者の感情を加味した翻訳へ」総務省・情報通信研究機構(NICT)主催「第3回多言語音声翻訳コンテストーアイデア部門 最終選考」(<https://tagen.go.jp/report/report2020-idea-poc.html>)

・有馬果歩・新山美月・石森明音・菊田葵「To Be All Round Women」野村ホールディングス・日本経済新聞社主催「第21回日経STOCKリーグ」大学生の部・入選
(<https://manabow.com/sl/result/21/nyusen.html>)

【その他】

・津田塾大学梅五輪飯田ワーキンググループ、IIDAブランディング事業、飯田市長記者会見（2021年2月16日）長野県飯田市

https://www.youtube.com/channel/UCaCRkbc7gS3d_2gG_biHd4g/videos?view=0&sort=dd&flow=grid

(津田塾大学梅五輪チャンネル)

「長野県飯田市の伝統文化・黒田人形芝居とは？」

「津田塾生が応援！飯田女子高校人形劇クラブ」

「<本編>飯田女子高校 人形劇クラブ PR 動画」

「<3分ダイジェスト>飯田女子高校人形劇クラブ PR 動画」

「<予告編>飯田女子高校人形劇クラブ PR 動画」

「<English Version>Iida Girls' Senior High School Puppet Club」

「<本編>津田塾生は見た！魅力あふれる、飯田」

「<予告編>津田塾生は見た！魅力あふれる、飯田」

「水引スポークアクセサリー「Me's」PR 動画」

・梅五輪プロジェクト 浮世絵ワーキンググループ（前田美樹、増野晶子、本間花、岸本マリア）・「バーチャル浮世絵展@千駄ヶ谷キャンパスの開発」渋谷のラジオ、渋谷社会部（2020年10月27日放送）

(55分) (<https://note.com/shiburadi/n/n381b27b282c8>)

- ・佐藤千明、澤田翠、高橋凜「外国にルーツを持つ子どもたちが抱える教育問題」渋谷のラジオ、渋谷社会部（2020年12月22日放送）（55分）(<https://note.com/shiburadi/n/n879ab4457118>)
- ・大木美黎、益田真歩、神田恵理子「津田塾・キューピー連携プロジェクトの活動」渋谷のラジオ、渋谷社会部（2021年2月23日放送）（55分）(<https://note.com/shiburadi/n/n88dbb26e4d9f>)

以上

所属	国際関係学科	氏名 (共同研究の場合は代表者)	柴田邦臣
研究課題名 社会的インクルージョン研究基盤形成：ロールモデルのための合理的配慮			
研究組織 津田塾大学・インクルーシブ教育支援室 ディレクタ 柴田邦臣（国際関係学科准教授）・・・全体統括 コーディネータ 松崎良美（国際関係学科助教）・・・地域連携・国内学会担当 専門アシスタント 三好祐子（学芸学部非常勤講師・手話通訳士）・・・福祉制度担当 研究ブランディング事業担当者 濱松若葉（TA・国際院生）・・・調査・広報担当 国際連携事業担当者 貝原千馨枝（TA・国際院生）・・・国際学会・イベント担当 事務員 浜中和華子（IES担当職員）・・・事務会計担当			
具体的な研究活動と成果の概要 (研究計画書の「2020年度の研究計画・方法」に記載した全ての内容に対して状況を記載) 2020年度は事前の計画以上に、本研究プロジェクトにおける「スプリング・ボード」となる年となった。新型コロナウイルス感染症の感染拡大にともない、本研究が対象とする障害者の環境は大きく変更を迫られ、特に障害のある子どもたちは「Learning Crisis」と呼ぶべき事態に直面した。それぞれ社会状況に合わせた対応を強いられる中で、本研究は、むしろ積極的にインクルーシブ・リーダーシップを体現するような、アクションリサーチによる研究と貢献をめざした。 1) インクルーシブ・リーダーシップモデルの全国調査 本プロジェクトの主眼である全国への質問紙調査を「Learning Crisis」調査として全国の特別支援学校向けに実施した。そのかいあって、日本ではじめてのCOVID-19危機下における関連調査として実施することができ、国際会議での報告や、多くのメディアでの報道などもいただいた。 2) 上記の分析結果をふまえたデプス・インタビュー、フィールドワーク Learning Crisisへのアクションリサーチとして、「学びの危機プロジェクト」(まなキキ)を開始し、多くのご注目をいただくことができた。今後は規模を拡大して実施していく予定である。			
研究業績・活動実績リスト 書籍 ・ (刊行予定) Yoshimi Matsuzaki, Kuniomi Shibata. <i>Reasonable Accommodation and Information Accessibility for students with disabilities in Japanese higher education.</i> Diversity & Inclusion in Japan. 研究論文 ・ 「障害児教育における評価・アセスメントとその方法—オンライン時代のための Differential Boost Hypothesis の再評価—」 貝原千馨枝・柴田邦臣 pp. 249-273 2021.3 津田塾大学紀要 53 巻 津田塾大学 ・ 「COVID-19 Crisisにおける日米労働間の差異—Essential Workers と ADA の分析から—」 濱松若葉・柴田邦臣 pp. 213-246 2021.3 津田塾大学紀要 53 巻 津田塾大学 ・ 「学生の視点から考える「よい学び」とは何か—津田塾大学における教育の実践から—」 松崎良美・柴田邦臣 pp. 59-84 2021.3 津田塾大学紀要 53 巻 津田塾大学			

- ・ 「新しい『魔法』の時代へ、ようこそ—Learning Crisis とポスト・コロナの情報社会—」 on-line, 2020.10 RAD-IT21 WEB マガジン, 日本ラッド株式会社
- ・ ” Mobile Technology of Learning and Communication for Students with Disabilities” , Matsumoto, S., Shibata, K., Hattori, A., pp.265-281 2020.3 Handbook of Research on Software for Gifted and Talented School Activities in K-12 Classrooms IGI Global

研究報告

- ・ ” Learning Crisis (1) School Closure and Learning Crisis of Special Education by COVID-19 (英語)” 2021.3 The 36th Annual Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, University of Hawaii, on-line
- ・ ” Learning Crisis (2) : ‘Seriously Double-Limited’ Learning English as a Second Language under COVID-19 in Japan (英語)” 2021.3 The 36th Annual Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, University of Hawaii, on-line
- ・ ” Learning Crisis (3) : Vocational Education for Students with Disabilities : From the Campaign of Essential Workers to the Concept of Essential Functions (英語)” 2021.3 The 36th Annual Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity, University of Hawaii, on-line
- ・ 「Web ページにおけるスクリーンリーダーとルビの共存 ～ 障害児向け学習サイトの事例から～」 2020.10 第108回 福祉情報工学会, 電子通信情報学会, 於 : on-line

シンポジウム

- ・ 松崎良美 「基調講演 : Learning Crisis とまなキキ」 第1回 学びの危機カンファレンス, 2020年7月30日. オンライン開催. <https://learningcrisis.net/?p=11382#toc7>
- ・ 松崎良美, 柴田邦臣 「「Learning Crisis」に関する実態調査 中間報告会」 第2回 学びの危機カンファレンス, 2020年10月25日. オンライン開催. <https://learningcrisis.net/?p=14490>
- ・ 松崎良美, 柴田邦臣 「「Learning Crisis」に関する実態調査 最終報告会」 第3回 学びの危機カンファレンス, 2021年1月23日. オンライン開催. <https://learningcrisis.net/?p=16634>

新聞記事掲載

教育新聞 「学びの危機=Learning Crisis COVID-19 と特別支援教育の未来」

https://www.kyobun.co.jp/tag/p20210126_tag/

- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (10)】 学ぶ意味と「意志の危機」に対峙するために」 (2021年3月8日)
- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (9)】 どう、支えるのか-理想と現実のバランスから-」 (2021年3月1日)
- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (8)】 誰が、支えるのか?」 (2021年2月24日)
- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (7)】 大学と「学問」の困難」 (2021年2月21日)
- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (6)】 「レガシーエディケーション」の困難」 (2021年2月17日)
- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (5)】 急速なオンライン化とEdTechの困難」 (2021年2月14日)
- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (4)】 長期化と人材、各種資源の困難」 (2021年2月7日)
- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (3)】 「新しい生活様式」下の「形骸化」」 (2021年2月3日)
- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (2)】 長期休校と格差の拡大」 (2021年1月26日)
- ・ 教育新聞 「【学びの危機 (1)】 「特別な時代」に「特別な努力」をかけて「学ぶ」こと」 (2021年1月26日) <https://www.kyobun.co.jp/education-practice/p20210126/>

- ・ 「【特別支援】休校中の遠隔教育に学校差 津田塾大の調査」教育新聞，2021年1月25日。
https://www.kyobun.co.jp/news/20210125_06/
- ・ 毎日新聞 点字毎日「特集 視覚障害と英語教育― 座談会で「障壁」浮き彫り」(2020年9月27日)
- ・ 東京新聞「<ひと ゆめ みらい>障害ある子の学習支える 学びの危機プロジェクト代表・柴田邦臣(しばた・くにおみ)さん(47)＝稲城市」(2020年8月31日) <https://www.tokyo-np.co.jp/article/52181>
- ・ 日経新聞「教員志望の学生奮闘 受験生向け高校紹介ビデオ 障害児の学習支援も」(2020年7月28日夕刊)
- ・ 毎日新聞 点字毎日「一歩踏み出す 津田塾大の科目等履修生 コロナ禍 子らの未来案じ」(2020年7月2日)
- ・ 「点字毎日 障害ある子の学び応援 津田塾大有志がサイト開設」毎日新聞・点字毎日，2020年6月14日。 <https://mainichi.jp/articles/20200611/ddw/090/040/014000c>
- ・ 「(東京)津田塾生ら考案 障害ある子にオンライン学習を」朝日新聞，2020年5月20日。
<https://www.asahi.com/articles/ASN5M6TRMN5LUTIL00G.html>
- ・ 教育新聞 「【コロナ時代の教育】障害ある子の学び 支援サイト開設」(2020年5月15日)
- ・ 読売新聞 東京多摩「障害児へネット教材 津田塾大グループ」(2020年5月14日朝刊)
(ほか)

そのほかのメディア掲載

- ・ ひばりタイムス「コロナを危機克服のきっかけに 津田塾大「学びの危機」調査の最終報告」(2021年1月24日) <https://www.skylarktimes.com/?p=27175>
- ・ ひばりタイムス「津田塾大「学びの危機」プロジェクトの2本が1、2位 ひばりタイムスの「記憶に残る」記事トップ10決まる」(2020年12月28日)
<https://www.skylarktimes.com/?p=26639&fbclid=IwAR29Sdr-RHCzyRNz3e9nbGf16AUXhdkrWGrh2Bj2zm6aD6IvXfHdyjbI75s>
- ・ ひばりタイムス「コロナ禍で障害児らの学びに困難 津田塾大の研究会が初の実態調査」(2020年10月26日掲載) <https://www.skylarktimes.com/?p=25783>
- ・ plum garden 「インクルーシブ教育支援室と考える 後編 『まなキキ』に込めた思い」(2020年8月公開) https://pg.tsuda.ac.jp/lecture/manakiki_202008.html
- ・ NHK ラジオ第1 Nらじ【学びの危機】
 - 05.26 放送「障がい児・学校再開後が最大のピンチ」
<https://www.youtube.com/watch?v=mucfNcVDIDU>
 - 05.27 放送「学習意欲・取り戻すにはどうしたら」
<https://www.youtube.com/watch?v=Bqp8C9U1RSY>
- ・ ひばりタイムス「障害児に向けオンライン教材紹介 津田塾の研究会が『学びの危機』サイト開設」(2020年5月15日掲載)
- ・ 朝日新聞 withnews 「『社会に尽くすモード』が独り歩き コロナ対策 管理社会の未来」(2020年5月7日掲載)
<https://withnews.jp/article/f0200507004qq0000000000000000W00810701qq000021039A>
- (ほか)

所属	学芸学部英語英文学科	氏名 (共同研究の場合は代表者)	大類久恵
研究課題名 津田アーカイブを用いた多様で先進的な女性ロールモデル研究			
研究組織 研究代表者名 大類久恵 学芸学部英語英文学科教授・津田梅子資料室長 高橋裕子 学長・学芸学部英語英文学科教授：対象者の選定とインタビュー、文献調査・研究 北村文 学芸学部英語英文学科 准教授：対象者の選定とインタビュー、文献調査・研究 根本和彦 津田梅子資料室事務室 事務室長事務取扱 村田安代 津田梅子資料室事務室：データベースの構築、所蔵、活用、対象者の選定、文献調査・研究 中田友紀 津田梅子資料室事務室：データベースの構築、所蔵、活用、対象者の選定、文献調査・研究 山寄千瑛 戦略推進本部事務室：データベースの構築、所蔵、活用、対象者の選定、文献調査・研究			
具体的な研究活動と成果の概要 (研究計画書の「2020 年度の研究計画・方法」に記載した全ての内容に対して状況を記載)			
インタビュー対象者の見直しと 2020 年度インタビュー対象者の確定 2020 年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、2019 年度に候補者として対面でのインタビューが不可能となった。感染拡大がやや減少傾向にあった夏以降、対面でのインタビューの可能性を探ったが、インタビュー対象者が高齢であり、居住されている施設への外部からの入館が不可能であるなどの理由から、諦めざるをえなかった。オンラインでのインタビューも考慮したが、アーカイブに所蔵することを考えると、昨年度収録した映像との画質の明らかな差がでることは望ましくないため、実施しないとの結論に至った。来年度も新型コロナウイルス感染症拡大の状況に大きな変化はないと考えられるため、本研究の内容については見直しが必要である。			
2 デジタルアーカイブのシステム拡充のための設計・開発、「津田アーカイブ」の制作 デジタルアーカイブのシステム拡充のための調査は 2019 年 3 月に開始された。提案および概算見積もり依頼 (3 月)、提案内容聴取後 ASP 方式によるシステム構築の方向性の確定 (5 月)、予算確定 (6 月)、システム概要確定 (10 月)、仕様作成 (11 月)、三社へ提案見積もり依頼 (12 月) を経て、2020 年 1 月末に凸版印刷提案の Image Works の採用が決定した。その後およそ半年をかけて、旧システムからのデータ移行作業が行われ、移行作業は 7 月に完了した。データ移行作業の完了後 7 月末に、共通科目「津田梅子と建学の精神」において教材として利用することを目的とした「卒業生オーラル・ヒストリー」(2019 年度に収録、編集をした本研究の成果物) の限定公開を行った。その後、利便性を高めるための微調整などを施した後、11 月 4 日に、新デジタルアーカイブシステムが公開された。本研究の成果であるインタビュー動画は「卒業生オーラ			

ル・ヒストリー」(ダイジェスト版およびフルバージョンの二種類)として新デジタルアーカイブシステムに収められた。

3 インタビューおよび文献調査・研究の実施

前述のように、2020年度には新たなインタビューを行うことができなかったが、2019年度にインタビューを行った小林和子先生から追加のお話のお申し出があり、電話での音声を録音した。

2019年度に収録した卒業生オーラル・ヒストリーについては、共通科目「津田梅子の建学の精神」において視聴課題として用い、オーラル・ヒストリーとして提示したロールモデルを履修者がどう受容したかの分析を試みた。履修者242名(全学部学科の1~4年生)から提出された回答からは、現代の女子大学生が、卒業生ロールモデルに敬意や憧れと同時に親近感を抱き、自らを重ねて考えていることがわかった。分析結果の詳細は、2020年9月4日に開催された公開研究会、およびその記録である『インクルーシブ・リーダーシップ公開研究会記録：インクルーシブ・リーダーシップ人材の輩出を見据えた研究の現在と今後』において報告した。

4 講演会、ワークショップ、ラウンドテーブルなどの記録

今年度は対面の講演会などの開催が難しく、新たなものは行わなかった。過去に開催された講演会などの音声記録の文字起こしをおこなった。いずれも本学卒業生など、女性ロールモデルに相応しい方々の貴重な講演である。今後、デジタルアーカイブシステムのなかに位置づけていきたい。文字起こしをおこなった音声記録は以下のとおりである。

- ・星野あい「私の歩んだ道」/藤田たき「国連の国際婦人年 世界会議に出席して」
- ・卒業生講演 総合1987年7月9日 藤田たき先生「私の半生」
- ・Talk & Talk 私にとって津田とは(出演:藤田たき ; 森山真弓 ; 吹田靖子 ; 内海房子 ; 杉野文栄 ; 宇都宮由美 ; 酒井真喜子)
- ・【星野あい・藤田たき】音源のテープ
- ・【大庭みな子 思い出すこと[1987年度ホームカミングデー講演]】

5 研究の中間報告

本研究の中間報告は、まず、2020年9月4日に津田塾大学千駄ヶ谷キャンパスで開催され、オンラインでも同時配信されたインクルーシブ・リーダーシップ公開研究会「インクルーシブ・リーダーシップ人材の輩出を見据えた研究の現在と今後」において、口頭による研究報告としておこなった。この研究会の記録は、『インクルーシブ・リーダーシップ公開研究会記録：インクルーシブ・リーダーシップ人材の輩出を見据えた研究の現在と今後』として刊行された。

研究業績・活動実績リスト

【著作】(論文)

Kitamura, Aya. 2020. "When a Household Becomes Multilingual: Family Language Practices of Japanese Mothers in Asian Global Cities." Paul Iida, Timothy Reagan, John W. Schwieter, Cuhullan Tsyoshi McGivern and Jason Man-Bo Ho eds., Readings in Language Studies, Volume 8, Critical Perspectives on Teaching, Learning and Society. Laguna Beach, CA: International Society for Language Studies. 302-321.

Kitamura, Aya. 2021. "'How I wish English would actually save us women!': Auguish, ambivalence, and agency among bilingual career women in Japan." Yoko Kobayashi ed., Attitudes to English Study among Japanese, Chinese and Korean Women: Motivations, Expectations and Identity. New York, Rotelidge. 125-140.

(その他著作)

高橋裕子 巻頭言「『大学職員』という用語をめぐる一考察」『大学職員論叢』第9号

赤松良子 高橋裕子 対談「未来の女性たちに託したい思い」 DCfIL オンラインセミナー 津田塾大学総合政策学部総合政策学科 赤松良子賞設立記念講演 講演録 津田塾大学 ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップ (DCfIL) 2021年3月1日 2-18

高橋裕子 巻頭言「逆光を、創造を灯す光に。」 『IDE 現代の高等教育』No. 624・10月号 IDE 大学協会 2020年10月1日 2-3

高橋裕子 「小平市女性のつどい 40周年記念講演会にて」『はばたき』小平市女性のつどい 2020年12月 4

高橋裕子 120周年記念CD スピーチ翻訳 解説

北村文、「ステイホーム下で母親たちが味わった絶望と悲鳴と笑い、それを社会は忘れてはならない」、講談社現代ビジネス、2021年3月12日。 <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/80963>

【口頭発表】

大類久恵、企画および基調講演、オンライン・ラウンドテーブル「Black Lives Matter」、津田塾大学 言語文化研究所「アメリカ文化研究会」・2020年度FD支援費「アメリカ研究に関する最新動向の把握とその教授法の獲得」主催、2020年7月25日。

高橋裕子 講演「高等教育における男女共同参画の現状とインクルーシブ・リーダーシップの可能性ーTsuda Vision2030と『変革を担う』女性リーダーの育成」 大学基準協会学長セミナー 大学基準協会 2020年10月9日 オンライン。

大野英男 三木義一 高橋裕子 村田治 パネルディスカッション「新時代の大学を目指して行動できる学長とはーポストコロナを見据えてー」 大学基準協会学長セミナー 大学基準協会 2020

年 10 月 9 日 オンライン。

高橋裕子 「高等教育における男女共同参画の現状—津田梅子による『変革を担う』女性リーダーの育成に学ぶ」 株式会社コマツ執行役員向け講演 2020 年 10 月 19 日 コマツ

水無田気流・内田良・北村文、対談「『私らしさ』の困難：ジェンダーバイアスから生きづらさを考える」渋谷区男女平等・ダイバーシティセンター<アイリス>講演会、2020 年 10 月 22 日、オンライン。

赤松良子 高橋裕子 対談「未来の女性たちに託したい思い」DCfIL オンラインセミナー 津田塾大学総合政策学部総合政策学科 赤松良子賞設立記念講演
2020 年 11 月 5 日 オンライン。

高橋裕子 ゲスト出演 NHKBS プレミアム「英雄たちの選択 『“明治”に挑んだ女性 ～“鹿鳴館の華” 大山捨松の実像～』」2020 年 11 月 25 日。

高橋裕子 講演「私にとってのアメリカ留学の意義」米国大学院学生会（船井情報科学振興財団後援）主催 『留学希望者対象説明会』 2020 年 12 月 5 日 オンライン。

高橋裕子 開会挨拶 国際開発学会第 31 回全国大会 プレナリーシンポジウム 「今、変化する時：包摂的な社会に向けたイノベーション」 2020 年 12 月 5 日 オンライン。

高橋裕子 戸田隆夫 中村恵 吉川元偉 渡部カンコロンゴ清花 パネルディスカッション「緒方貞子先生が国際開発協力に残されたレガシー」 緒方貞子先生追悼セッション 国際開発学会第 31 回全国大会実行委員会企画セッション プログラム 2020 年 12 月 6 日、オンライン。

高橋裕子 「女子高等教育のパイオニア：津田梅子」筑波大学特別講義『大学と学問』 2021 年 1 月 6 日 オンライン。

高橋ケンジ、堀潤、北村文「コロナと孤独と新しいつながり方を考える講座」しゅやフォーラム 2020 プチ、2021 年 2 月 27 日、オンライン。

高橋裕子 「津田梅子～日本における女子高等教育のパイオニア～」 令和 2 年度茨城県弘道館アカデミー 県民大学『紙幣に描かれた女性たち』 2021 年 3 月 13 日 オンライン。

高橋裕子 基調講演「ビジョナリーが集う小平」 小平市第四次長期総合計画策定記念シンポジウム『つながり共に創るまち小平』 2021 年 3 月 20 日 ルネこだいら。

大類久恵 講演「津田梅子の生涯と女子高等教育」小金井市自主学習グループ・クリスタル 2021 年 3 月 26 日、小金井市前原暫定集会所 A 室。

高橋裕子 「津田梅子～次世代の女性リーダー育成に託した夢とビジョン～」 令和2年度茨城県弘道館アカデミー 県民大学『紙幣に描かれた女性たち』 2021年3月27日 オンライン。

所属	総合政策学部	氏名 (共同研究の場合は代表者)	小舘 亮之
研究課題名 グローバルな計算社会科学的視点による社会科学と情報学の融合教育・研究プログラムの開発			
研究組織 鈴木 貴久(総合政策学部特任助教:データ収集と分析、教育プログラムの開発) 若原 俊彦(総合政策研究所客員教授:教育プログラムの開発)			
<p>具体的な研究活動と成果の概要</p> <p>(研究計画書の「2020年度の研究計画・方法」に記載した全ての内容に対して状況を記載)</p> <p>自治体等が公開しているオープンデータやソーシャルメディア上に共有された大量のデータなどを含むソーシャル・ビッグデータの流通と蓄積により、従来の社会科学分野に対する情報科学分野からのアプローチが可能となり、新たな学際的な学術分野、計算社会科学(Computational Social Science)として注目されている。本研究では、従来の社会科学分野に対する情報科学分野からのアプローチとして注目されている計算社会科学的視点により、教育・研究プログラムの開発を行う。</p> <p>当初立案した2020年度の計画は以下の通りであった。</p> <p>【2020年度】</p> <p>2019年度の調査結果に基づいて、千駄ヶ谷キャンパスを拠点とするプログラム開発を行い、試行する。一案として、東京オリンピック・パラリンピックの開催期を実施の候補時期として、観光振興、地域メディア機能を高めるための教育プログラムを試行し、収集されたデータの分析を行い、その教材化について検討する。また、この試行の結果についての研究会を開催し、2019年度の事例調査に協力が得られた学外機関からフィードバックを得ることにより、プログラムの改善を図る。</p> <p>2020年度は、COVID-19の世界規模での感染拡大により、東京オリンピック・パラリンピックの開催が延期となり、観光振興、地域メディア機能を高めるための教育プログラムを試行し、収集されたデータの分析が困難となったことから、実施内容の変更を余儀なくされた。</p> <p>以下、1. 教育プログラムおよび研究プロジェクトの調査と試行、2. 計算社会科学に関する研究動向の調査と及びそれを用いた研究 3. 地域のオープンデータに基づくコンテンツの作成 の3つの小テーマごとに成果の概要を記す。</p> <p>教育プログラムおよび研究プロジェクトの調査と試行</p> <p>大学共同利用機関法人情報・システム研究機構のデータサイエンス共同利用基盤施設(Joint Support-Center for Data Science Research (ROIS-DS)の公募型共同研究に採択された研究課題「多次元尺度法を用いたオープンデータ・ビッグデータからの消費者感性情報の抽出とマーケティングへの利用研究」と連携する形で公開されているオープンデータ並びに研究用に提供されている情報学研究データリポジトリを用いた研究を実施した。教育プログラムとしては、セミナーにおいて実施した自然言語処理、計量テキスト分析についての学習の延長として課題を設定し、研究を行った。研究成果の一部は、電子情報通信学会、情報処理学会、情報コミュニケーション学会において発表した。うち、情報コミュニケーション学会での発表は学生優秀発表賞(研究奨励賞)を受賞した。</p> <p>計算社会科学に関する研究動向の調査と及びそれを用いた研究</p> <p>計算社会科学領域においてはこれまでと同様に、社会科学的な問いに答えることを目的としてソー</p>			

ソーシャルメディア上のデータやモバイルデータなどを用いた研究が多数報告されている。その中でも、感染症拡大の影響を多様なデータを用いて分析する研究が増加したことが今年度の大きな特徴である。人々の移動や感染状況そのものを研究対象とするだけでなく、感染対策についての人々の意見や議論についてソーシャルメディアデータを用いて分析した研究や、人々の生活の軸がオンラインにシフトしたことによる社会的影響やその課題への対応策の検討などについても情報科学的手法を用いて分析する研究などへの広がりを見せている。本プログラムにおいても、オンライン環境における大学生の帰属意識や心理的距離など、従来は社会科学分野で扱われてきたトピックについて、ヴァーチャル空間やオンライン授業のデータなどを活用した研究が行われた。

3. 地域のオープンデータに基づくコンテンツの作成

前年度に必続き、千駄ヶ谷地域の神社、寺院などの観光情報や江戸時代以降の歴史、文化や地理などの情報を収集し、WordPress を用いて千駄ヶ谷地域の情報提供サイトとして、Web サイトを構築(<http://waka.d.dooo.jp/wp/index.html>)している。渋谷区で公開しているオープンデータとしては、保育所、避難所、公園、AED 設置場所、文化財、公衆トイレ(<https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kusei/tokei/opendata/index1.html>) に限定されているため、現在構築中の千駄ヶ谷の情報サイトに利用できる情報としては十分ではない。このため、インターネット百科事典と言われる Wikipedia をベースとする DBpedia(<http://ja.dbpedia.org/>)などの他、個別のサイトのホームページも参考にしている。DBpedia からは概要(abstract)よりキーワード抽出を行って三つ組(Triple: 主語-述語-目的語の構造からなる)の RDF(Resource Description Framework)情報を得ているが、WikiPedia 間のリンクが多いため、フィルタにより必要な情報を抽出してリンクさせている。また、各施設の位置情報は Google Map を用いて緯度・経度情報を Triple 化し、地図情報にはオープンソースの Leaflet(<https://leafletjs.com/>) を用いて地理院地図をベースに Web 地図を作成している。これにより千駄ヶ谷 LOD(Linked Open Data)を作成するとともに、千駄ヶ谷関連情報のキーワードマップにより可視化し、そのリンク特性などを評価している。また、新たにレンタルサーバを借用し、現在構築中の Web サイトからコンテンツを移行して、近日中に公開する予定である。

研究業績・活動実績リスト

学会発表

岩井憲一，吉見憲二，針尾大嗣，谷本和也，上田祥二，田中康裕，小舘亮之，“Q&A コミュニティにおける質問文を用いた特徴可視化システムについて”，国立情報学研究所 IDR ユーザフォーラム 2020，2020年11月24日。

吉見憲二，針尾大嗣，谷本和也，上田祥二，岩井憲一，田中康裕，小舘亮之，“Q&A コミュニティの質問文を用いた育児の悩みの可視化”，情報処理学会第91回コンピュータセキュリティ・第40回セキュリティ心理学とトラスト・第90回電子化知的財産・社会基盤合同研究発表会，2020年11月25日。

吉見憲二，谷本和也，田中康裕，岩井憲一，上田祥二，針尾大嗣，小舘亮之，“Q&A コミュニティにおける応答に着目した子育ての悩みへの対応”，情報処理学会研究報告電子化知的財産・社会基盤(EIP)，Vol. 2021-EIP-01，No. 4，pp. 1-6，2021年2月。

増田珠美，小舘亮之，“バーチャルキャンパスにおいて背景情報とアバタが大学への帰属意識に及ぼす効果 ～津田塾大学千駄ヶ谷キャンパスをケーススタディとして～”，信学技報，vol. 120，no. 417，LOIS2020-51，pp. 24-29，2021年3月。

縣美早，小舘亮之，“科目推薦機能を有するeポートフォリオの設計と開発”，信学技報，vol. 120，no. 417，LOIS2020-52，pp. 30-34，2021年3月。

小舘亮之，大室良介，若原俊彦，曾根原登，“オープンデータのデータ利活用を促進させる利用者特性に関する探索的調査”，信学技報，vol. 120，no. 417，LOIS2020-53，pp. 35-40，2021年3月。

溝部晴奈，小舘亮之，“公共交通機関 Web サイトの Web アクセシビリティに関する調査分析”，情報コミュニケーション学会第18回全国大会，C1-1，2021年3月6日。

谷本和也，吉見憲二，田中康裕，岩井憲一，上田祥二，針尾大嗣，小舘亮之，“テキストマイニングによるサーフィンの普及に向けた課題の分析 -Q&A コミュニティにおける応答に着目して-”，情報コミュニケーション学会第18回全国大会，C1-4，2021年3月6日。

吉見憲二，谷本和也，田中康裕，岩井憲一，上田祥二，針尾大嗣，小舘亮之，“Yahoo!知恵袋における情報セキュリティ意識の経年変化”，情報コミュニケーション学会第18回全国大会，C1-5，2021年3月6日。

橘風花，古市香菜子，原口史帆，小舘亮之，“利用者参加型の知恵共有サービスにおけるコミュニケーションの課題と提案”，情報コミュニケーション学会第18回全国大会，C2-4，2021年3月7日。
(学生優秀発表賞(研究奨励賞)を受賞)

戸根木希，鈴木貴久，曾根原登，“オンラインでのピアラーニングを活性化させるためのグループ分け方法の検討 -授業での課題取り組み時の共感距離に着目した実証研究-”，情報処理学会第83回全国大会，2G-04，2021年3月18日。

その他

千駄ヶ谷地域の情報提供サイト <http://waka.d.doou.jp/wp/index.html>

所属	総合政策学科	氏 名 (共同研究の場合は代表者)	中條 美和
研究課題名 東京都議会議員の政治的態度と多様性の分析を通じた実践的教育			
研究組織			
<p>具体的な研究活動と成果の概要</p> <p>(研究計画書の「2020 年度の研究計画・方法」に記載した全ての内容に対して状況を記載)</p> <p>○都議会議員ツイッター・ブログ分析結果の Web 公開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020 年第 1 回緊急事態宣言中（4 月 7 日-5 月 6 日）における都議会議員のツイッターとブログの分析（成果：https://sites.google.com/a/tsuda.ac.jp/mnakajo/SophomoreSeminar） <p>○都議会議員にサーベイを実施・論文を Web 公開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020 年 10 月、調査票発送（併せて Web での回答も受付）、11 月末まで回答受付 ・都議会議員 127 名中 42 名（郵送回答 22 名、Web 回答 20 名）から回答（回収率 33.1%） ・総合政策学部 2 年生 10 名が論文執筆 <p>(Web 上に掲載：https://sites.google.com/a/tsuda.ac.jp/mnakajo/SophomoreSeminar)</p> <p>○ワークショップ開催計画</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020 年度予定していた都議を招いてのワークショップ実施は COVID-19 により断念 ・2021 年度 6 月頃に女性知事経験者を招いた（オンライン）シンポジウム開催に向けて、前熊本県知事・潮谷善子氏に打診中 			
<p>研究業績・活動実績リスト</p> <p>活動実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップ主催「インクルーシブ・リーダーシップ人材の輩出を見据えた研究の現在と今後」オンライン公開研究会・第 1 部「東京都議会議員の政治的態度と多様性の分析を通じた実践的教育」発表（2020 年 9 月 4 日、津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス） <p>公開研究会記録：https://dcfil.tsuda.ac.jp/ebook2020/index.html#target/page_no=1</p>			

所属	国際関係学科	氏名 (共同研究の場合は代表者)	松崎良美
研究課題名 主体的学びを支える情報のアクセシビリティを考える—マイノリティのリテラシーの実証研究			
研究組織 柴田邦臣 (ICT の教育現場活用に関する専門的知識提供) 三好祐子 (手話による情報提供に関する専門的知識提供)			
具体的な研究活動と成果の概要 (研究計画書の「2020年度の研究計画・方法」に記載した全ての内容に対して状況を記載) 2019年より着手した点字・手話・音声・書字日本語などの伝達形態の違いによる「わかりやすさ」「わかりにくさ」の把握のための調査 (Reasonable Accommodation of Reading Accessibility) を継続して実施し、特に点字ユーザーと対照群の比較・分析を実施した。手話ユーザーに視聴してもらった「リーディング・テキスト」については手話動画とし6本の動画を制作しているが、その手話動画作成において発生したろう者との議論についても分析を実施し、手話翻訳の過程でどのような点が表現しやすく、表現過程に困難がありうるのか検討を行った。また、点字ユーザーから継続的に話を伺い点訳ルールの特長を把握し、高等教育機関における情報のアクセシビリティを考える際の配慮点などの整理を行った。併せて主体的学びを実現させるフィールドにおける情報のアクセシビリティに関して、支援を担う可能性のある大学生を対象としたワークショップ形式の調査などを実施している。 また2020年度はCOVID-19感染拡大を受け、Learning Crisis 研究会の立ち上げ、「まなキキサイト」の開設、全国の特別支援学校の実態調査等も併せて実施し、分析・報告を行っている。Learning Crisis 研究会関連の各種取り組みやイベントは、本研究プロジェクトの理論的基盤としても位置付けられる。本調査プロジェクトは今年度が最終年度となるが、引き続き調査を実施し分析し知見を報告していく予定である。また、本研究を理論的土台として、社会調査に応用した科研費採択研究としても発展している。			
研究業績・活動実績リスト			
<u>書籍</u> (刊行予定) Yoshimi Matsuzaki, Kuniomi Shibata. <i>Reasonable Accommodation and Information Accessibility for students with disabilities in Japanese higher education.</i> Diversity & Inclusion in Japan.			
<u>研究論文</u> 松崎良美, 柴田邦臣「学生の視点から考える『よい学び』とは何か——津田塾大学における教育の実践から——」『津田塾大学紀要』53, 2021年, pp59-84. (刊行予定) 松崎良美, 柴田邦臣「社会調査実践のプロセスから考える——インクルーシブな調査研究と社会問題探究の関連性——」『総合研究』No. 7, 津田塾大学国際関係研究所, 2021.			
<u>研究報告</u> 松崎良美「主体的学びを支える情報のアクセシビリティを考える——マイノリティのリテラシーの実証研究」インクルーシブ・リーダーシップ人材の輩出を見据えた研究の現在と今後 インク			

ルーシブ・リーダーシップ公開研究会」2020年9月。オンライン開催

Yoshimi matsuzaki, Kuniomi Shibata. *Learning Crisis (1): School Closure and Learning Crisis of Special Education by COVID-19*. Pacific Rim International Conference on Disability & Diversity March 2021. Online Conference.

シンポジウム

松崎良美「基調講演：Learning Crisis とまなキキ」第1回 学びの危機カンファレンス，2020年7月30日。オンライン開催。 <https://learningcrisis.net/?p=11382#toc7>

松崎良美，柴田邦臣「「Learning Crisis」に関する実態調査 中間報告会」第2回 学びの危機カンファレンス，2020年10月25日。オンライン開催。 <https://learningcrisis.net/?p=14490>

松崎良美，柴田邦臣「「Learning Crisis」に関する実態調査 最終報告会」第3回 学びの危機カンファレンス，2021年1月23日。オンライン開催。 <https://learningcrisis.net/?p=16634>

ワークショップ

「インクルーシブ教育・研究 体験プログラム」2021年1月23日，オンライン開催。

検討会

「図表のディスクリプションの検討会」（2021年2月21日）オンライン開催

新聞記事掲載

「東京）津田塾生ら考案 障害ある子にオンライン学習を」朝日新聞，2020年5月20日。
<https://www.asahi.com/articles/ASN5M6TRMN5LUTIL00G.html>

「点字毎日 障害ある子の学び応援 津田塾大有志がサイト開設」毎日新聞・点字毎日，2020年6月14日。 <https://mainichi.jp/articles/20200611/ddw/090/040/014000c>

「【特別支援】休校中の遠隔教育に学校差 津田塾大の調査」教育新聞，2021年1月25日。
https://www.kyobun.co.jp/news/20210125_06/

ネット記事掲載

plum garden 「インクルーシブ教育支援室と考える 後編 『まなキキ』に込めた思い」（2020年8月公開） https://pg.tsuda.ac.jp/lecture/manakiki_202008.html

ひばりタイムス「コロナ禍で障害児らの学びに困難 津田塾大の研究会が初の実態調査」（2020年10月26日掲載） <https://www.skylarktimes.com/?p=25783>

ひばりタイムス「津田塾大「学びの危機」プロジェクトの2本が1、2位 ひばりタイムスの「記憶に残る」記事トップ10 決まる」（2020年12月28日）

<https://www.skylarktimes.com/?p=26639&fbclid=IwAR29Sdr-RHCzyRNz3e9nbGf16AUXhdkrWGrh2Bj2zm6aD6IvXfHdyjbI75s>

ひばりタイムス「コロナを危機克服のきっかけに 津田塾大「学びの危機」調査の最終報告」（2021年1月24日） <https://www.skylarktimes.com/?p=27175>

本研究に得られた知見を下記ウェブサイト上で公開した。

「書く」ことを考える・口頭伝承から作文まで」 <https://learningcrisis.net/?p=11770>

「文字の持つ不思議—表記の仕方と文体」 <https://learningcrisis.net/?p=12059>

「文章から、にじみ出る個性の不思議」 <https://learningcrisis.net/?p=12584>

「なんでそんな漢字になる感じ？」 <https://learningcrisis.net/?p=13418>

「かぎかっこてんまる」 <https://learningcrisis.net/?p=16144>

所属	情報科学科	氏名 (共同研究の場合は代表者)	杉村 大輔
研究課題名 インクルージョンにおけるAI（人工知能）の活用可能性			
研究組織 杉村大輔（情報科学科）・・・AIテクノロジー、情報工学担当 柴田邦臣（国際関係学科）・・・福祉社会・インクルージョン担当 (濱松若葉(大学院国際関係学研究科)が、福祉AI研究を専攻し、分析を担当する)			
具体的な研究活動と成果の概要 社会的インクルージョンの実践面においてAIがどのような応用をされているのか・リスクを含むのかについて、COVID-19 crisisによってもたらされたオンライン環境下においても社会で広く議論し続けることを狙いとして、下記の研究や研究会を実施した。 (a)インクルージョンとAIに関するディスカッションの場の提供 第2回「学びの危機」カンファレンスのプレカンファレンスとして実施された「まなキキ公開編集会議」において、2019年度にAIとインクルージョンを考える上での論点として抽出した話題（AIは差別を減らすか、むしろ増やすか）の提供を行った。当日は、学内外から17名の参加者がカンファレンスのZoomに集まり、社会的インクルージョンとAIについての議論を交わした。なお、会議のダイジェスト記事を「まなキキ」の下記のページで公開している。 【7月30日 まなキキ公開編集会議(その他チーム)】 https://learningcrisis.net/?p=11304 (b)インクルージョンに貢献しうるAI活用法の研究・提言 障害のある子どもたちの「学び」をオンラインの教材で支えるべくして発足した「まなキキ」の活動を通じ、現在のアクセシビリティ基準ではWebサイトのルビとスクリーンリーダの読み上げの共存が困難になっていることを見出した。障害のある人をサポートするためのAI活用の観点から、Webサイトのルビとスクリーンリーダの読み上げを共存させることを可能にする方法を研究した。「まなキキ」サイトに実装するとともに、福祉情報工学研究会・後述のインクルーシブAI研究会において提言を行った。なお、研究の概要については「まなキキ」の下記ページで公開している。 【スクリーンリーダ特集：スクリーンリーダモードの作り方その(1)】 https://learningcrisis.net/?p=14509 (c)先進的なリーダーシップを取っている研究者・実践者を招致しての「インクルーシブAI研究会（オンラインシンポジウム：インクルーシブ教育とAI）」の実施			

2019年度に論点として抽出していた教育に関わるAIについての議論を深めるために、Learning Crisis研究会（まなキキ）ならびに社会情報学会・定例研究会（理論部門）との共催で「オンラインシンポジウム：インクルーシブAIと教育」を開催した。これまでインクルーシブAI研究会で福祉AI研究を専攻してきた、津田塾大学大学院国際関係学研究科の濱松若葉が報告を行うとともに、パネリストとしてインクルーシブAI研究会の会員であり(b)の研究において多大な貢献をして下さった中川三枝子氏と星眞維美氏、「AIと倫理」をけん引する気鋭の研究者である河島茂生先生、香川短期大学教授の中俣保志先生をお招きし、それぞれご講演頂いた。なお、インクルーシブAI研究会の代表者として、杉村大輔・柴田邦臣も司会ならびにパネリストとして参加している。オンラインシンポジウムは、(1)講演：「AI先生」は教師の職を奪うか？；(2)実践報告：スクリーンリーダーとルビの共存；(3)実践報告：AIを用いたオンラインでの情報保障；(4)パネルディスカッション：インクルーシブAIと教育、の4つの内容から構成され、随時参加者からの質問に受け答えを行う形の進行がなされた。他大学の学生や研究者、本学OG、地域の方など、昨年度以上に幅広い層の58名に参加頂いた。実施後、メーリングリストを通じて、参加者同士の議論や交流を深める場の提供も行っている。

研究業績・活動実績リスト

濱松若葉ほか, 2020「7月30日 まなキキ公開編集会議(その他チーム)-AIを、考える-」(7月30日 於: Zoom).

濱松若葉・星眞維美・中川美枝子・柴田邦臣, 2020「Webページにおけるスクリーンリーダーとルビの共存～障害児向け学習サイトの事例から～」 「第108回(令和2年度第3回)福祉情報工学研究会」(10月23日 於: Zoom).

濱松若葉・星眞維美・中川美枝子・柴田邦臣, 2021「実践報告：スクリーンリーダーとルビの共存」 「Inclusive AI研究会(オンラインシンポジウム：インクルーシブ教育とAI)」(2月21日 於: Zoom).

柴田邦臣, 2021「実践報告：AIを用いたオンラインでの情報保障」 「Inclusive AI研究会(オンラインシンポジウム：インクルーシブ教育とAI)」(2月21日 於: Zoom).

研究会のメーリングリスト管理(2020年4月1日～現在まで)

2020年度 研究ブランディング研究費による研究成果等（概要）報告書

2021年 3月 31日

所属	国際関係学科	氏名 (共同研究の場合は代表者)	柴田邦臣
研究課題名 クロスオーバー・若手リーダーシップ育成事業			
研究組織 森川美絵(総合政策学科)・・・センター長			
<p>具体的な研究活動と成果の概要 (研究計画書の「2020年度の研究計画・方法」に記載した全ての内容に対して状況を記載)</p> <p>2020年度は、2019年度の成果を活かし、本プロジェクトにとっても飛躍の年として、多くの若手研究者への支援、およびリーダーシップ育成に乗り出す予定の年であった。しかし、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大にともない、研究環境が大きな変更を迫られるなかで、緊密さを長所とした本プロジェクトにとっては、感染拡大を避けるために、止むを得ず本格的な実施を断念することとなった。</p> <p>本プロジェクトの仕組みそのものは精緻化されており、従来の研究環境に戻れば、その意義はますます重要であるといえるが、COVID-19 Crisis がいまだに進行する中では、どのように遂行していくか、各教員・スタッフの負担が著しく増大する観点からも、やや留保条件を付けざるをえなくなっている。若手支援の必要性は変わらないため、今後の本プロジェクトの実施については、広く議論の上で、合理的に決定されると考えている。</p>			
研究業績・活動実績リスト			
該当なし			

【ブランディング活動】

- ① ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップ(DCfIL)の取り組みについては当該センターのウェブサイトにおいて、各種イベントの告知や開催報告を定期的に発信した。また事業開始から3年経ち、各プロジェクトの実績や成果を公表するなど、情報発信のプラットフォームとしての活用に努めた。
- ② 広報実績は38-39頁の表4のとおりである。プレスリリース等を各メディアに41件発信。大学公式ウェブサイト、DCfILポータルサイトや広報誌に27件の記事を掲載し、FacebookやTwitter等のSNSにおいても記事の拡散を図った(18件)。その他、外部メディアに「まなキキ」を中心に25件取り上げられた。
- ③ 「インクルーシブ・リーダーシップ人材の輩出を見据えた研究の現在と今後」と題したオンライン公開研究会を2020年9月4日(金)に開催。多様な研究分野に及ぶ8つの各プロジェクトの進捗を共有し、本学関係者のみならず、他機関の研究者、企業の方、高校生の方等の参加があった(本学関係者20名、一般参加者46名)。本研究会では、これからの時代・変革期の社会に求められる「インクルーシブ・リーダーシップ」のあり方に着眼し、多様性を生かす社会を実現するために解決すべきことは何か、それを担う人材をどのように育てるかということに対するアプローチの多様性や新たな視点を見出すことを趣旨とした。
- ④ 2020年11月5日(木)には、本学の卒業生でもあり、男女雇用機会均等法の成立に尽力した赤松良子氏を招き、「未来の女性たちに託したい思い」と題した講演会をオンラインで開催。オンラインで配信され、在学生や教職員をはじめ、一般の方々や国内外の卒業生からも参加があり、約500名規模の講演会となった。様々なステークホルダーに対して、本学の掲げる「『変革を担う女性』の持続的育成を目指した『インクルーシブ・リーダーシップ研究』拠点の形成」をアプローチする場となった。
- ⑤ DCfILの成果物としては、上記公開研究会の「インクルーシブ・リーダーシップ人材の輩出を見据えた研究の現在と今後」のe-book制作、「未来の女性たちに託したい思い」講演動画及び講演録を制作した。なお、赤松良子氏の講演に関しては、本学のデジタルアーカイブ(後述)にも卒業生のオーラルヒストリーとして収録している。より広く本学の活動を周知するべく、紙媒体のみならずデジタルコンテンツでの事業紹介・発信にも力を入れた。
- ⑥ 各プロジェクトが、各々のテーマに沿って活動を前進させ、研究成果の発信など有効な取り組みがあった。一例として、「社会的インクルージョン研究基盤形成：ロールモデルのための合理的配慮」が、コロナ禍における子どもたちへの学習支援のために、「『学びの危機(まなキキ)』Counter Learning Crisis Project」を立ち上げ、その活発な活動内容が多数メディアで取り上げられたことが挙げられる。
- ⑦ 「津田アーカイブを用いた多様で先進的な女性ロールモデル研究」プロジェクトでは、各界で先駆的な業績を残してきた卒業生や本学関係者にインタビューを行い、そのオーラルヒストリーをデータベースとして蓄積することを目的として活動した。さらに、既存のデジタルアーカイブシステムよりも、動画等より充実したコンテンツを提供できるよう新たなシステム“IMAGWORKS”を導入・公開した。史資料をより簡便にアクセスできるようになり、順調な運用が行われた。
- ⑧ 「データ活用型政策研究と実践的教育プログラム開発」では、本学の教員と学生によっ

て、各省庁が毎年公表する白書図表を横断的に検索できるデータベースの構築・公開。図表コンテンツは 3 万件以上におよび、図表の年次や出典統計名などもデータベース化している。また、公表されているバックデータへのアクセスも可能とした。また、データの変遷を追える点から、教育・研究のみならず企業活動等にも付加価値のあるデータベースを実現させた。

- ⑨ 同じく研究ブランディング事業に選定された他大学との交流・共同研究。立命館アジア太平洋大学をはじめとした、大学との会議（国際会議「第 18 回 アジア太平洋カンファレンス」登壇—2020 年 11 月 14 日開催）や研究会（Diversity and Inclusion in Japan 研究会の開催—2021 年 1 月 9 日）に本学の研究者が登壇・参加し、本学の取り組みを発信・情報交換した。立命館アジア太平洋大学とは、共同執筆による『Diversity & Inclusion in Japan』（イギリス Routledge 社より 2022 年までに出版予定）の原稿が進行中である。
- ⑩ 広報体制を強化するために、戦略推進本部事務室にブランディング活動および広報・普及に関する事務を担当する派遣職員を継続して雇用している。
- ⑪ 本事業に係る活動を国内外で促進するためのプラットフォームとして、またブランディングイメージ向上・発信のためのツールとして、大学公式英語ウェブサイトのリニューアルを実施した。従来のサイトと比較し、よりユニバーサルなデザイン・操作性を可能としたことにより、海外への効果的なアプローチにも活用でき、大学としての価値をより多くの人に届くことが期待できる。
- ⑫ 研究ブランディング広報・普及費の予算執行額は表 3 のとおりである。適切な予算執行を行った。

表 3 広報・普及費予算執行実績

(単位：千円)

部署	業務	予算	執行額	残高
戦略推進本部事務室	ブランディング活動全般	13,400	11,547	1,853
津田梅子資料室	デジタルアーカイブシステム関連	500	500	0
千駄ヶ谷キャンパス事務室	本事業に係る地域連携活動	100	92	8

表4 広報実績

プレスリリース等	発信日	DCFiLポータルサイト	発信日	公式Website・広報誌等	発信日	公式Facebook等SNS	発信日	メディア取り上げ記事等	発信日
白書・審議会データベース公開のお知らせ（メール）	配信件数20件 2020/6/2	DCFiLリーフレットを公開しました	2020/4/17	prum garden「インクルーシブ教育支援室と考える」	2020/7/27	読売新聞まなキキ特集について	2020/5/13	Eテレ SWITCHインタビュー 達人達（たち）「村木厚子×今野敏」	2020/4/11
白書・審議会データベース公開のお知らせ（FAX）	配信件数14件 2020/6/2	障害のある子どもたちの学習を応援するポータルサイト立ち上げのお知らせ	2020/5/13	大学公式Website「赤松良子賞設立記念講演『未来の女性たちに託したい思い』を開催」	2020/11/5	まなキキ2020Twitter「津田塾大学の公式ホームページでの紹介」	2020/5/14	withnews「『社会に尽くす』モードが独り歩き コロナ対策、管理社会の未来 失われつつある自由とリスクのせめぎ合い」	2020/5/7
広島大学高等教育研究開発センター「公開研究会開催の案内」	2020/8/11	【ラジオ放送のお知らせ】「学びの危機」プロジェクト	2020/5/26	大学公式Website「新デジタルアーカイブシステム公開のお知らせ」	2020/12/01	朝日新聞まなキキ特集について	2020/5/21	Yahoo!Japan news「『社会に尽くす』モードが独り歩き コロナ対策、管理社会の未来 失われつつある自由とリスクのせめぎ合い」	2020/5/7
ASAGAO「公開研究会開催の案内」	2020/8/19	2019年度進捗状況報告書	2020/5/27	Tsuda Today118「赤松良子賞設立記念講演『未来の女性たちに託したい思い』開催報告」	2021/3/31	まなキキラジオ放送について	2020/5/26	読売新聞オンライン（多摩版）「障害児へネット教材紹介 津田塾大グループ」	2020/5/14
国立女性教育会館「公開研究会開催の案内」	2020/8/20	白書・審議会データベース公開のお知らせ	2020/5/29	Tsuda Today118「新デジタルアーカイブシステム公開」	2021/3/31	白書・審議会データベース公開のお知らせ	2020/6/1	読売新聞朝刊「障害児へネット教材紹介 津田塾大グループ」	2020/5/14
津田塾大学同窓会「公開研究会開催の案内」	2020/8/24	NPO・企業・学生の連携を促進 「Tsuda Outreach」のサイトを公開しました	2020/6/5			白書・審議会データベース公開のお知らせ（総合政策学部FB）	2020/6/1	朝日新聞デジタル「（東京）津田塾生ら考案 障害ある子にオンライン学習を」	2020/5/20
国立女性教育会館「赤松良子賞設立記念講演のご案内（津田塾大学）」	2020/10/12	【Tsuda Outreachインタビュー】「こども食堂」経済的な課題を抱える子どもたちへの支援の手 NPO法人 川崎寺子屋食堂	2020/6/5			Tsuda Outreachについてお知らせ	2020/6/8	朝日新聞朝刊「オンライン学習 どんな子も」	2020/5/20
津田塾大学同窓会「赤松良子賞設立記念講演のご案内（津田塾大学）」	2020/10/14	【Tsuda Outreachインタビュー】不妊治療と仕事の両立が可能な社会へ NPO法人 フォレシア	2020/6/5			Tsuda Outreachについてお知らせ（総合政策学部FB）	2020/6/10	「Nらじ」 NHKラジオ第一「学校再開の影で～障害児『学びの危機』プロジェクト～」	2020/5/26
国際女性の地位協会「赤松良子賞設立記念講演のご案内（津田塾大学）」（事務局へメール周知）	2020/10/16	【Tsuda Outreachインタビュー】地域が一丸となって子育てを支援する社会へ 認定特定非営利活動法人こまちぷらす	2020/6/5			白書・審議会データベースがひばりタイムスで取り上げられました	2020/6/11	ひばりタイムス「各省庁白書の図表を横断検索 津田塾大で初のデータベース化」	2020/6/9
		【Tsuda Outreachインタビュー】日本のIT・STEM業界のジェンダーギャップをなくす 一般社団法人Waffle	2020/6/5			白書・審議会データベースがひばりタイムスで取り上げられました（総合政策学部FB）	2020/6/10	ひばりタイムス「各省庁白書の図表を横断検索 津田塾大で初のデータベース化」 Twitter	2020/6/9
		【Tsuda Outreachインタビュー】暴力のない社会の実現に向けて 認定NPO法人エンパワメントかながわ	2020/6/5			点字毎日「まなキキ」が取り上げられました	2020/7/16	ひばりタイムス「各省庁白書の図表を横断検索 津田塾大で初のデータベース化」 Facebook	2020/6/9
		【Tsuda Outreachインタビュー】貧困の改善、国際的な給食支援プロジェクト NPO法人せいぼじゃぱん	2020/6/5			点字毎日「まなキキ」が取り上げられました（総合政策学部FB）	2020/7/21	点字毎日「障害ある子の学びを応援 津田塾大有志がサイト開設」	2020/6/11

プレスリリース等	発信日	DCfILポータルサイト	発信日	公式Website・広報誌等	発信日	公式Facebook等SNS	発信日	メディア取り上げ記事等	発信日
		【オンラインイベント】第1回 学びの危機 カンファレンス【オンラインイベント】第1回 学びの危機 カンファレンス	2020/7/27			IES松崎助教インタビュー	2020/7/27	毎日新聞オンライン「点字新聞 障害ある子の学び応援 津田塾大有志がサイト開設」	2020/6/14
		【DCfILオンラインイベント】インクルーシブ・リーダーシップ公開研究会	2020/8/19			総合政策学部Twitter「公開研究会開催の案内」	2020/8/21	2000623渋谷のラジオ「白書・審議会データベース」	2020/6/23
		DCfILオンラインイベントを開催しました	2020/9/21			【DCfILオンラインイベント】インクルーシブ・リーダーシップ公開研究会のご案内	2020/8/24	点字毎日「一歩踏み出す 津田塾大の科目等履修生 コロナ禍、子らの未来案じ 中川美枝子さん」	2020/7/5
		赤松良子賞設立記念講演「未来の女性たちに託したい思い」を開催	2020/11/5			東京新聞 柴田准教授インタビューが取り上げられました。	2020/8/30	毎日オンライン「一歩踏み出す 津田塾大の科目等履修生 コロナ禍、子らの未来案じ 中川美枝子さん」	2020/7/5
		新デジタルアーカイブシステムを公開	2020/11/9			赤松良子賞設立記念講演のお知らせ	2020/10/12	日本経済新聞「教員志望の学生奮闘 受験生向け高校紹介ビデオ」	2020/7/28
		アジア太平洋カンファレンスで伊藤由紀子総合政策学部教授が報告	2020/12/22			新アーカイブシステム公開	2020/12/1	東京新聞「<ひと ゆめ みらい>障害ある子の学習支える 学びの危機プロジェクト代表・柴田邦臣（しばた・くにのみ）さん（47）＝稲城市」	2020/8/31
		Diversity and Inclusion in Japan研究会を開催	2021/2/17					点字毎日「視覚障害と英語教育」	2020/9/24
		2020年9月開催 DCfILオンライン公開研究会の記録（e-book）を公開	2021/2/26					RAD-IT21 WEBマガジン「新しい「魔法」の時代へ、ようこそ—Learning Crisisとポスト・コロナの情報社会—」	2020/10/1
		2020年11月開催 DCfILオンラインセミナー「赤松良子賞設立記念講演」の記録を公開	2021/3/10					ひばりタイムス「津田塾大『学びの危機』プロジェクトの2本が1、2位 ひばりタイムスの『記憶に残る』記事 トップ10決まる」	2020/12/28
		第36回電気通信普及財団賞 柴田邦臣准教授が奨励賞を受賞	2021/3/30					コロナを危機克服のきっかけに 津田塾大「学びの危機」調査の最終報告	2021/1/24
								教育新聞【学びの危機（1）】「特別な時代」に「特別な努力」をかけて「学ぶ」こと	2021/1/26
								教育新聞【特別支援】休校中の遠隔教育に学校差 津田塾大の調査	2021/1/26
								公益財団法人電気通信普及財団「助成・援助・表彰 第36回電気通信普及財団賞の受賞者、2020年度研究調査助成及び2020年11月期シンポジウム等開催援助の対象者を決定いたしました。」	2021/3/26
41件			27件				19件	26件	

5. まとめと今後の課題

2020年から全世界の人々がコロナ禍に見舞われ、その感染の波は第1波、第2波、第3波、第4波と続いている。本学は教育上・経営上のこれまでに対応したことの無い諸問題に対処している。2020年度は、本事業の国の支援を受ける最後の区切りの年度だった。また、本学創立120周年でもあったが、各種周年事業のほとんどは中止・延期となっている。こうした中、この研究ブランディング事業の活動の在り方自体も問われた1年間でもあった。

結果的には、関係教職員・学生の尽力もあり、充実した業績・実績をあげ、コロナ禍においても相応の成果が出せたといえよう。本事業の核である Tsuda Vision 2030 のモットー「逆境を、創造を灯す光に」にあるように、困難な状況下においてそれを将来を見据える契機としながら現実的に即した諸活動を展開しえたこと、その結果事業推進の業績・実績を報告できたことに、少し安堵している。

補助事業期間においては本センターを中心に、目標に掲げた『『変革を担う女性』の持続的育成』を推進するため、事業に関わる各種研究の運営を後押しし、また、ダイバーシティとインクルージョンに関する実証実験の場を作り出しながら、共生社会の実現に向けて主導的に取り組むインクルーシブ・リーダーシップのモデルについて検討し、その情報を発信してきた。

今後もその活動やミッションを醸成し、多様な女性の活躍・インクルーシブな環境の実現のため、これまで培ってきた実績や成果をもとに研究を発展させ発信していく予定である。

2021年4月16日

ダイバーシティセンター・フォー・インクルーシブリーダーシップ センター長